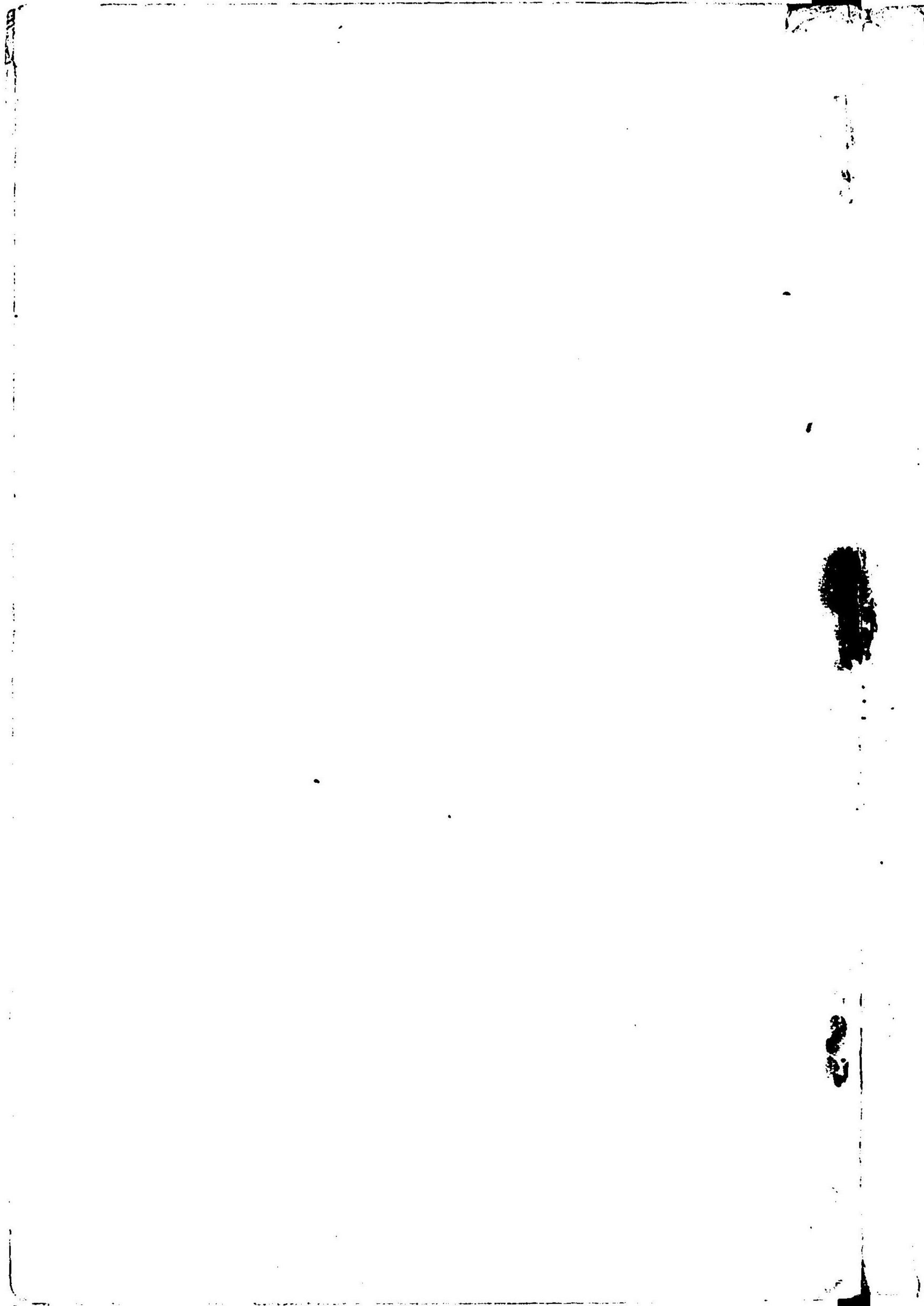


正曲
調譜
薩
摩
琵琶
歌
大全
編前

241
74



特22

336

正曲譜
調譜
薩摩琵琶歌大全前編

東鄉大將閣下題字
西村天囚君序
角田浩々君序
大阪薩摩琵琶研究會編纂

大阪盛文館

編治
54
丙交



大塔宮御詠

琵琶乃音のむかしに

かへてものかなし

芦の瀬川の

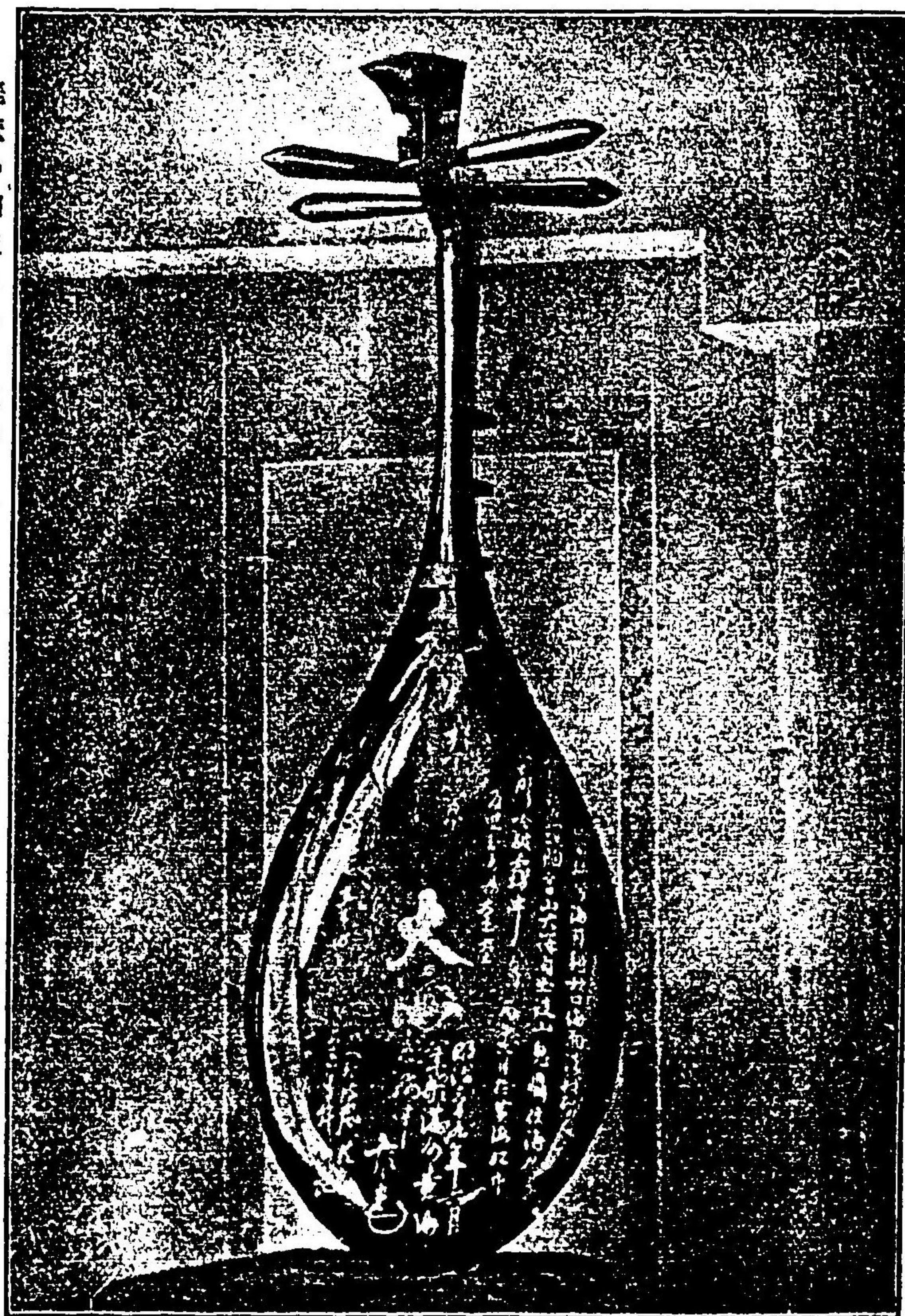
せゝの水音

廉

潔

東郷書

琵琶の藏秘翁純利玉兒



琵琶の厨板にある文字は伊東元帥、東郷大將、清浦奎子、高崎正風男、上村中將等の各大家が揮毫せられたるものなり

序

薩摩琵琶の流行。今日より盛なるはなし。少年も彈じ。壯夫も諷ひ。佳人才子も争ふて四絃を弄ぶよう。今は薩摩一國の物にはあらで。日本の琵琶なりとて。さまざまなる異名も出來つ。名異なれば曲調も亦随つて變じ。悲壯の聲漸く化して清婉の音と爲らんとす。説く者は曰く。既に薩摩一國の物にあらずして。廣く世に行はるゝ以上は。方言土音の訛をも正して。人耳に入り易からしめでは。人心を感動す可らず。随ひて曲調の變りゆくを免れざるも。亦自然の勢なりと。難す

る者は曰く。薩摩琵琶には。自ら薩摩琵琶の特殊なる音調あればこそ。人も耳を傾ぶりて世にも行るれ。今其の特殊なる音調を失ひて。淨瑠璃のやうなる。將た祭文のやうなる聲調と爲りたらんには。是れ薩摩琵琶にあらず。鶴琵琶とも烏琵琶とも名くべし。但苟も薩摩琵琶と稱するからは。薩摩琵琶の特殊なる曲調を失はぬやうにして。其の妙を發揮すべきなりと。其の言皆一理あり。新を喜び異を好むは。なべて世の人の情なれば。薩摩琵琶にも亦新聲別調を出すこそ。進みゆく世の例ならめ。然れど實にも難者の説の如く。

苟も薩摩琵琶と稱するからは。其の特殊なる妙處を失はざらんこそめでたけれ。抑薩摩琵琶の妙處は。方言土音の訛ありて角立ち耳立ちたるにはあらず。崩れ吟替りの凜々乎颯々乎として悲壯勇烈なるのみにもあらず。第一の妙處は。諷ひ且つ彈ずる者に武士根性あること是なり。如何に忠孝節義の事蹟を諷ふとも。諳ひ且つ彈ずる者にして武士根性なければ。其の聲音曲調に神來の趣を欠きて。人耳を動かし人心を感ぜしむ可らず。薩摩琵琶は士氣を鼓する者なり。士氣を鼓すべき薩摩琵琶が。近來いとしく商氣を

帯び來れるは。誰が耳にも聞き分けつべし。物の音に
商氣あるほど厭はしきはなし。まして士氣を鼓すべ
き薩摩琵琶をや。昔の薩摩琵琶は。座頭法師の手に在
りしも。其は俗間のもてあそびにして。世にも猛くや
さしき薩摩兵子が心耳を澄ましけんは。心ある武士
の人知れず。獨り樂まんとして學びけん琵琶の音にぞ
ありける。人に聞せんともあらず。物乞はんとも
あらず。春のあした月の夕。劍を撃ち弓矢を引く手に
撥とりて。柱にもたれつゝ。搔鳴らしけん四弦の響は。
所謂天籟の音神來の曲にして。鬼神も腸を斷ちぬべ

し。まして心ある若殿原いかでか志を勵まさらん。
自然なる感歎の聲を放ちて。覺へずも腕を扼しつゝ。
火の中水の中にも飛入らんず。氣象を養ひしものと
こそ聞け。一席を幾圓ならでは。一人前幾錢ならでは。
など價を定めて技を賣る。今の琵琶法師とは。雲泥の
差ならずや。今のせち辛き世に。琵琶法師が武士根性
を飾りたればとて。物食はせん人もあるまじければ。
高楊枝も時節に因れり。強ちに責む可きにあらず。然
れど門に立ちて物を乞はん爲ならで。苟も士氣を鼓
せんとして薩摩琵琶を弄ぶ者あらば。先づ商氣を消除

して我れと我身に武士根性を養ひつゝ。撥を取り絃を弄ぶべきものぞかし。近頃渡邊君薩摩琵琶歌大全を編して序を予に請ふ。君は薩摩の人なり。想ふに必ず薩摩琵琶の何物たるを知らん。君其れ此の第一義を發揮するに志あるか。因て數言を卷首に題して。以て世の薩摩琵琶を好む者に告ぐ。

明治四十二年四月庭櫻満開の日

天 囚 居 士 識 す

序

予か家に野々口立圃の鴨長明畫賛一幅を藏す墨痕淡々一個の法師を描きて心にやすめる雨夜の琵琶の月。予は少時これを見て唯た何となくをかしき疎畫をかしき賛なりとのみ感したりしが。後長明の方丈記を読み四季物語を味ふに至りて。この立圃の畫賛は幽深なる趣味を予か腦裏に印象し來れり。後初めて平家琵琶を聽くに及んで此趣味いよゝく深く薩摩を知るに及んで更に此樂の人の情絃に觸るる處を感得せり。立圃の畫賛は即ち予か情絃を鳴らす唯一の機となれり。淵明に無絃琴あり予は此畫賛を壁頭にかゝけて予の無絃琵琶となす。予は無絃に

してなほ既にその趣味を感ず有絃の器に對して嘈々切々の曲を彈するを聞かんはその妙元より説くを要せざらん。

濤聲山下君薩摩琵琶の歌曲を集成し每篇曲譜を附し琵琶を修むるものをしてその獨樂の興を得せしめんとす。琵琶曲廣く行はるゝ現時の風潮に際し、まことに時宜を得たる述作といふへし。予は君か此舉を賛し予か琵琶に有する感興を録して此書の刊行を壯ならしめんと欲す。

明治四十二年神武天皇祭日

浩々歌客

○琵琶の由來

琵琶はよつのをともしふ木製の四絃四柱なる樂器にて抱きて撥にて彈くものなり。體は楢面にして扁く、長さ二尺餘あり、棹の頭轉手のある所背に折れたり。古より琵琶と稱するは、雅樂に合せ、又平家を語るに用ふるものにて、今はその他に、薩摩琵琶、筑前琵琶、肥後琵琶等ありて、稍々製作を異にす。琵琶はもと、漢土の樂器にて、馬上にて彈きしものなるが、かの國にては、これは胡國より出でたりとし、或は魏の武帝の造る所ともせり。我が邦へは、奈良朝時代に渡りたりしことは、奈良正倉院の御庫に四面あり、又職員令大同四年の官符に唐樂師十二人の中に琵琶師あるにて知らるべし。その後、仁明天皇の朝に、藤原貞敏といふ者琵琶に妙を得て、この道の祖と仰がる。王朝よりその末にかけて、琵琶の曲の貴族に貴ばれたる。又容易に秘曲を受けざりしことは、其例證に乏しからず。されば天下の名器として、朝廷は勿論諸家に秘藏せられたるものも數十に及び、弦上、青山の二面は朝廷にて最も貴重せられたり。さて此頃、琵琶は雅樂を奏するにのみ用ゐられたる。鎌倉時代より、本家物語に合せて語ることに始まれり。これ平家琵琶の起源なり。

◎平家琵琶 は其起原前述の如し、平家物語に節をつけ、琵琶に合せて謡ふべきやうにしたるは、葉室行長の生佛といへる盲人に放へて、語らせたりといふこと、二三の書に見ゆ、生佛の後を如一檢校といひ、二人の弟子あり、明石覺一、城一是れなり、この覺一、足利尊氏と親あるに依り、替者漸く勢を得たり、以てその道の盛んなりしを知るべし、後世此の道に、城方、都方の兩派あるも、その原は、皆如一、覺一、城一等を祖とすといへり、平家を語るに、曲節ありて、琵琶に合するを引句といひ、琵琶をさしおきて語るを語句といへり、覺一はまた城了と稱す、夜の雨の窓をうつにも碎くれば、心はもろきものにぞ有りける」といふ歌を詠じて、後小松院より、夜の雨の城了との稱を賜はりきといふ。

◎薩摩琵琶 は其起原平家琵琶にあれど、何時如何なる人が、之を彈奏し始めたるや、其詳説を盡すを得ず、古來薩摩國に於ては、琵琶法師なる彈奏者あり、士人の中にも斯道の名手妙なからず、又比叡山延曆寺を本山とする、天臺宗の一寺院、鹿兒島にあり、其寺院を常樂院といひ、一院悉く盲目僧侶なり、同寺の勤行は唯一の地神經に由り、薩摩琵琶を以て樂器の一とせり、薩摩琵琶は、其製作方他の琵琶と異なれり、他の琵琶は函製なるも、薩摩琵琶は桐板を削り、腹板を覆ひ、以て其音

調を微妙ならしむるを主とせり、故に他の琵琶に比し、其量重く、其撥使ひ難く、女子に到底其妙音を發するを得ざるべし、又撥も他のものと異り、廣くして大なり、之を弾くときは、親指と食指とを、左右極度に開きて撥を押へ、以て絃に掛くるを法とせり、薩摩國に於ては、單に琵琶と稱するも、固と薩摩國に發達し、今もその地を本として、廣く世間に行はる、より此名あるに至れり、薩摩琵琶の由來に就ては、諸家の説一も首肯する能はずと雖も、重野文學博士の説は、其真に近きが如し、博士は曰く、薩摩琵琶の起原は、平家琵琶にあれど、平家琵琶も亦由て來る所あり、是れより前、支那南宋の頃、琵琶を以て戦争談を謡ふことあり、南宋の都を建業といひ、今の南京邊に當る、こゝにて琵琶を以て、宋の滅ぶる時の戦争談を哀れに語ることを盛んに行はれ、男も女も、琵琶を弾きて、戦争談並に小説を語りき、これに倣ひて我邦にては、平家の滅びたる戦争談、即ち平家物語を、琵琶にあはせて謡ひしが、是れ即ち平家琵琶なり、琵琶の異名を建業といひしも、前の地名より出でたりと思はる、さてこの平家琵琶は、京都より起りて諸國にも行はれ、遠く薩摩の地にも入りたりしが、薩摩は支那に近き國にて、中にも建業邊の人の歸化したるもの多くありて、支那の琵琶を直接に傳へたるは疑ふべからず、されば薩摩琵琶は

平家より轉じ、更に支那の歸化人よりその語、口調を學び、自らその調子に化して、一種異なる調べとはなれり、その語る所は主として戰爭談、または禪僧の悟道の文句を多しとす云々、要するに薩摩琵琶は音調高雅にして、曲譜も亦悲壯なるが故に、青年子弟の精神修養上には、妙なからざる感化力を有せり、近來各地に盛んに行はれ、學生など喜んで之を歌謡彈奏するに至れり。(編者)

左の二篇は琵琶の音調を叙述したる千古の傑作なるに依り茲に之を登載す(編者)

琵琶行

白樂天

海陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃。醉不成、歡慘將別、別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲。移舟相近邀相見、添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思、似訴平生不得志。低眉信手續續彈、說盡心中無限事。輕攏慢捻抹復挑、初為霓裳後六么。大絃嘈嘈如急雨、小絃切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘。水泉冷澀絃凝絕、絃絕不通聲暫歇。別有幽愁暗恨生、此時無聲勝有聲。銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴。曲終收撥當心畫、四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言、唯見江心秋月白。沈吟放撥、絃中聲頓衣袂起、斂容自言本是京城女。家在蝦蟆陵下住、十三學得琵琶成。名屬教坊第一部。曲罷長歎善才服、粧成每被秋娘妬。五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不知數。細頭銀篋擊節碎、血色羅裙翻酒污。今年歡笑復明年、秋月春風等閑度。弟走從軍阿嬾死、暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦。商人重利輕別離、前月浮梁買茶去。去來江口守空船、送船明月江水寒。夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干。我聞琵琶已曠息、又

聞此語重唧唧同是天涯淪落人相逢何必曾相識我從去年辭帝京謫居臥病潯陽城
潯陽地僻無音樂終歲不聞絲竹聲住近湓江地低濕黃蘆苦竹遶宅生其間旦暮聞何
物杜鵑啼血猿哀鳴春江花朝秋月夜往往取酒還獨傾豈無山歌與村笛嘔啞嘲哢難
爲聽今夜聞君琵琶語如聽仙樂耳暫明莫辭更坐彈一曲爲君翻作琵琶行感我此言
良久立卻坐促絃絃轉急淒淒不似向前聲滿座重聞皆掩泣座中泣下誰最多江州司
馬青衫濕

彈九彈琵琶圖

菊地 三溪

秋滿關山風浙瀝萬木怒號吹欲折流雲縹緲月半輪故溪聲若雨夜堂寂中有一絃伴一
燈燈火影暗玉蟲凝此時靈臺湛若水不着塵滓轉清澄起抱琵琶試一曲不爲指法所
縛束一彈乍怪裂帛聲蜀魄啼血曙山綠再彈飄訝叫曉猿又似逐臣憑枉冤彈至繁絃
急曲處嘈々切々欲斷魂曲訖自語又自歎如斯秘曲無人贊有人來慰今夕心何惜吾
家廣陵散戶外有客走入帷膝前再拜語夙思自稱生是源博雅十年渴想茲老師彈師
欣然感篤志悉授流泉喙木秘呼斯師而有斯生竊喜斯道未墜地我聞樂工皆能盲蟬
師目盲心却明尤惜世無韓昌黎空使張籍臥柴荆我嘗經過大津驛步抵蓬坂日之夕
行人指點蟬丸祠一坐古廟留古跡蟬師清操清若蟬高風依稀古神仙樹梢乍有殘蟬
語似聞喙木與流泉

緒言

其音調流泉喙木其曲譜悲愴壯烈鬼神を泣かしめ懦夫を起た
しむるもの蓋し薩摩琵琶特有の徳なるへし。古來薩摩の國
に於ては斯道に堪能なる法師をして之を彈かしめ之を謠は
しめ戰士出征の首途を祝し武運の長久を祈り座頭講なる琵琶
會に青年子弟の志氣を鼓舞し武士道を發揮するに努めた
り。故に語句高雅にして卑猥に流れず音律亦莊重にして纖
巧に墮ちず娛んで淫せず好んで濫れざるは斯の樂に如くも
のなし。今や到る處盛んに愛重せらる從て其曲本も數多刊
行せられたりと雖も未だ悉く古今の歌曲を集めたるものな

く、加ふるに數卷に分輯するを以て、閱覽に不便を感せしむること尠なからざるなり。本會茲に見る所あり、古今の歌曲一百四十八闋を前後二卷に網羅し、斯道に堪能の名手に音譜を請ひ、之を歌曲の傍に註符し、以て同好の士に便せんと欲す、是れ本書を編纂したる所以なり。本書か斯道攻究者の資料となり、又精神修養上の伴侶となるを得は、單り本會の幸榮のみならず、琵琶道に裨益する所益し、尠なからざるなり、本書を刊行するに當り、聊か編纂の趣意を陳ふと云爾。

明治四十二年四月

大阪薩摩琵琶研究會々員

濤

聲

誌

凡例

- 一 ◎印(大千) は歌中最高の音聲を發する句にして之を山岳に例ふれば絶頂なり
- 一 ○印(中干) は大千よりは低く普通の音聲よりは高く大千を山の絶頂とすれば中干は山腹なり
- 一 一、印(切り) は歌の上段に一ヶ所下段に二ヶ所あるは一定の法則にして歌に依りては中段等にもありて重もに或る語句の一段落を告ぐるところにあり
- 一 ●印(崩れ) は合戦の場を大千、中干及地音普通の聲等にて千變萬化の抑揚を付け或は急霰驟雨の如く或は龍嘯虎吼の如く激戰奮闘の状況を現出する様に心懸くへし
- 一 △印(中吟) は音聲高低の相違あるも其歌ひ方は殆んど同
- 一 □印(地吟)

しく、共に切りの代りに用ゆるものにして短句の終りにあり切りと吟替えんかへに類似す

一×印えん吟替かへは歌中最も悲愴哀痛の感投句にて一句は高くして天を仰ひて訴ふるか如く一句は低くして地に俯して哭するか如く壯夫をして轉感涙に涙なみだはしむる様に歌ふものとする

一歌中音譜なきは凡へて地音ぢおん普通の聲と思ふへし然りと雖も丘陵起伏するか如く多少の抑揚あることを忘るへからす

一本書は古今の歌曲を残らす蒐集したりと雖も滑稽淫靡なるもの例へば大石兵六夢物語、五大洲朝飯前、鴛鴦の夢、薄か本等は薩摩琵琶歌とすへきものにあらざるを以て之を編中より除けり

一本書に收むる所の歌曲は前編に六十八曲を載せ後編に八十曲を載せり

一本書刊行後の新作歌曲又は薩藩古老の口碑のみに残り居る歌曲あらは異日増補すへし

明治四十二年四月

編者誌

二段	三三
芙蓉峰	三一
王昭君	三二
七卿落	三四
武藏野	三五
○ 兒島高德	三七
俊基朝臣東下	三九
母の誠	四四
蚬 蛾	四六
川中島	四八
○ 那須與市	五一
國 船	五五
墨 繪	五五

○ 常陸丸	五八
吉野落	六一
初段	六一
二段	六五
石童丸	六八
狂 女	七三
錦の御旗	七五
迷悟もとき	七九
武士道	八〇
群 鳥	八三
母の教	八五
小 督	八六
大和魂	八九

老蘇の森	九一
須磨寺	九二
甲斐殿道行	九四
威海衛	九八
赤星	一〇一
初段	一〇一
二段	一一二
三段	一二五
梅が枝	一三六
王政復古	一三八
松籟	一四一
送別	一四二
灘廻	一四三

橘中佐	一四五
月照	一五一
奇縁	一五三
物狂	一五八
櫻狩	一六〇
河内宿	一六二
本能寺	一六三
怨の雪	一六九
上村艦隊	一七一
月花	一七六
潯陽江	一七八
葉山の御夢	一八三
若木の花	一八五

御夢の跡……………一八七

閉塞隊……………一九〇

花の木……………一九四

春夏秋冬……………一九六

日本海海戦……………一九七

小楠公……………一九九

吹雪の敵……………二〇三

秋の夕……………二〇六

計六十八曲

金 剛 石

曲譜 正調 薩摩琵琶歌大全 前編

大坂薩摩琵琶研究會編纂



石

金剛石もみが、すば玉の光りはそはざらむ人も學びて後に
 こゝろまじの徳はあらはるれ時計の針の絶間なくめぐるが
 如く時の間も日影惜みてはげみなば如何なるわざかならざ
 らむ水はうつはに従ひて其さまくになりぬなり人は交は
 る友によりよきにあしきにうつるなり己にまさるよき友を
 選び求めてもろともに心の駒にむち打て學びの道にすゝめ
 がい

春日野に下萌へ出る若草の歳の戸明けて秋津洲霞渡れる片
岡に月は残りて雉子鳴く明けの友鶴君が代の壽祝ふ初聲に
南山の榮へ久しき松竹の落葉搔きとる諸人の遊ぶ小川の菊
の露流れも匂ふ五百歳の齡を國にゆづる葉の朝日輝く富士
の峯是を蓬萊山とは謠ひつゝ七寶の峯は影を湖水に浸し木
々の梢も荒磯の月海上に浮むでは鬼も走る浪の上縁樹影沈
むでは魚木に登る風情かな五風十雨の御代の春四海も靡く
時津風君が治むる御代なれば幾萬代までも代らぬ御代こそ
目出度けれ。

○花の香

梅は匂ひて櫻は花よ人は情の下に住む嶺の小松もひとり立
とは申せとも夜半の嵐は逃れがたし富士や淺間の嶽とても
霧や霞に埋もれ三千世界に光を照す日月さへも雲のどさし
は如何せんましてや人間は五尺にたらぬ身を持ちて一人立
して世を渡らんと思ふ人こそはかなけれ君は臣下を頼み臣
下はまた君を尊み奉る親子兄弟夫妻が中また朋友の交りと
ても互に頼みたまれて妹背の中にて世を渡らむと思ふ人
こそ是れ誠の人ならめ吾關白に過ぐる身は風の前なる燈火
にてはなけれども消ゆるに易き身を持ちて悪をたくむは地
獄なり善を願ふ是れ極樂なる地水火風は娑婆の假もの死し
て冥土に赴むけば我ものとは一物もなく釋迦も孔子も名

のみ残して今はなし。達摩尊者の無一物と説かれし事も、實に
 理なりと知られたり。さもあらば、古華にましたる美人の數を
 數ふれば、漢の李夫人、唐の楊貴妃、我朝にては二條の后、和泉式
 部に小野の小町、常磐御前と云はれし人も死すれば、野邊の土
 となる。其名も高尾の紅葉、野田の小藤、吉野の櫻、北野の梅も、盛
 りの程は名も高ければと散りて、後は色も香もなし。

○旅順口

黃龍雲を呼び起す力も頓に盡きてより、滿洲の野や高麗の山
 漫りにあらず、貪慾に鷲の翼を束の間に殺ぎし勳功のあらま
 しを、いさや奏てむ聞けよかし、明治三十一年七月の二、七
 日の東雲に海にかやく朝日艦、三笠初瀬に富士八島、又敷島

の曇りなき君が御稜威を大空に翻へしたる軍艦旗高く掲げ
 じ六隻は、東洋無雙の戦闘艦守るも撃つも自在なり、巡洋艦に
 は高砂や千歳笠置に吉野艦扱て又甲裝巡洋艦出雲磐手に吾
 妻艦八雲淺間や常磐艦以上合せて十六隻之に従ふ驅逐艦さ
 つと降りくる村雨に姿もいつか白雲や朝潮くぐる速鳥の外
 に數隻連らなりて響を競ふ風情なり、この精銳を率ひたる聯
 合艦隊司令長官、東郷中將を初めとし申すも畏き事ながら、東
 伏見の御宮に、山階華頂の兩宮は、御健氣にも將校の職を奮つ
 てとり給ふ、此神聖なる艦隊は、上は金玉の御身より下は水兵
 に至るまで、國のためには親にも別れ、君が爲には妻子を捨て
 し、忠勇義烈の大丈夫が豫て期したるとき來ぬと、佐世保をあ

どの遠征の錨を抜て渺茫たる八重の潮路に乗り出でぬ静か
 なること處女に似て逸するときは脱鬼の如き我艦隊はいち
 早く翌る八日の夕波に舳艦正々堂々と敵を目ざして進みけ
 る露の艦隊は兼てしも彼が根拠と頼みたる旅順の砲臺を後
 ろにし水雷艇を前にして戦闘陣形を作りつゝ守護さびしく
 備ふるも我は流石に過ぎし頃渤海灣の戦に腕に覺の大丈夫
 が奮つて射出す巨砲の弾丸敵も劣らす打出す互の砲聲天地
 を動かし渦巻きかへす黒烟旅順港外山は吼へ海は怒りて忽
 ちに身の毛もよだつ修羅の場我の機先に制せられ彼が陣形
 亂れたる波間を縫ふて我艦隊決死の勇士が鍛錬の魚形水雷
 を發すれば狙ひ違はず命中す其音凄く浪をあげ見るくう

ちに戦闘艦二隻の外に甲裝の巡洋艦を沈めたり其翌日に猛
 烈なる總攻撃の鋒先に露の艦隊はあはれにも或はうたれ沈
 められ右往左往に逃げちりぬ是れより疊に仁川へ我艦隊を
 分遣し瓜生少將之をすべ隙をうかふ敵艦をものゝ見事に
 打破り英佛獨艦の目の前に猛き功績を顯はして曇りがちな
 る東洋に起す御國の神風に吹き拂らはれし雲霧の晴れて握
 らん海上權手にとる如き捷報を傳へたる日は紀元節勇みて
 祝ふ旗影に老も若きも一齊に唯萬歳と叫ぶ聲天地も碎けむ
 ばかりなり欺世欺天亦欺已豺心狼骨萬邦知縱然自恃頑兇性
 焉敵堂々仁義師地圖を按じて固唾呑む我陸軍の兵が日毎に
 睨む日本刀西比利亞の野やウラルの山も貫かむ鷲の翼も落

さなむ。

○千代の春

かゝる目出渡御代なれば、國々諸所にいたるまで、千代の春、
歳の秋をたのしむも、これ皆君の惠の深き故ぞかし。よ
君を仰ぎ奉つる思ひく。ののつくりいらかを並べ軒を列
ね、高殿傑閣を構へ、旭の光り夕月の影うつる光りのかやく
は言ふもをろかに思はれて、庭には金銀の砂石を敷き、四方の
園はをびたし、不老門を出入る人は皆袖をつらねて色はゆ
る、これや名に聞く天の羽衣、仙境の春の樂みも、かやくあらん
かほと治まる御代なれば、吹く風までも枝を鳴さずといへば、
また人として君がこの世を、千代萬代と祈らぬ者こそなかり。

ける。

○春の調

新玉の年の初めの壽や、昔替らす歌揚る、笛と鼓の音までも、春
の調に聞へつゝ、玉簾ゆるく風たちて、舞の袂も長閑なる、神の
井垣の老松も、枝を連らね葉をかさね、うるも大夫の影高く、齡
を君にゆづる葉の常磐の色ぞ類ひなき、軒端に咲ける梅が枝
も、和泉式部の縁とや、床しくかほる窓のうち、文見る袖にうつ
りくる、好文木の名に耻ぢず、又高砂住の江の松に相生の尉と
嬬妹脊の契り末長く、千代のためしに引れつゝ、四方の海原浪
なきて、吹くも静けき、時津風、枝も鳴らさぬ御代の春、千秋樂に
は、民をなで、萬歳樂には、命を延ぶる樂も、年毎に、今日酌み替す

盃も君と御國を祝ふなる、松灘こそ目出度けれ。

○城山

勝海舟翁作歌

夫れ達人は大觀す、拔山蓋世の勇あるも、榮枯は夢か幻ろしか、
大隅山の狩倉に、眞如の月の影清く、無念無想を觀すらん、何を
怒るやいかり雄の俄に、激する數千騎、勇みに勇むはやり雄の、
騎虎の勢ひ一徹に、留り難きぞ是非もなき、唯身一つを打捨て、
若殿原に報ひなん、明治十年の秋の末、諸手の軍打破れ討つ討、
れつ頓て散る、霜の紅葉の紅の血潮に、染めど願みぬ薩摩武雄、
のをたけびに、打散る彈丸は板屋打つ、散たばしる如くにて、面
を向けむ方ぞなき、こたまたに響く、関の聲、百の雷一どきに、落る。

城

山

が如き有様を、隆盛打見てほそ、そ笑みあな勇ましの人々や、亥
の年以來養ひし腕の力も、試し見て心に、残ることもなじいざ
諸ともに塵の世を、脱れ出んは此時と、孤軍奮闘破圍還、一百里
程壘壁間、吾劍已折、吾馬斃、秋風埋骨、故郷山、唯一言を名残に
て、桐野村田を始とし、宗徒の輩諸ともに、煙と消へし丈夫の心、
の中こそ、勇々しけれ、官軍之を望み見て、昨日までは、陸軍大將
と仰がれ、君の龍遇世の覺へたく、無かりし英雄も、今日はあ
へなく、岩崎の山下露と、消果て、遷ればかはる世の中、無常
を深く觀じつ、無量の思ひ胸に、満ち、唯悄然と、隊伍を整へ、目
と目を見合す許なり、折しもあれや、吹おろす、城山松の夕嵐、岩
間にむせぶ、谷水の無情の聲も、何となく、悲鳴するか、と聞なさ

れ、戎衣の袖を濡し添ふらん。

○蓬萊山

めでたやな君が惠は久方の光り長淵き春の日に不老門を立
出で四方の景色を詠むれば峰の小松に雛鶴棲みて谷の小川
に龜遊ぶ君が代は千代に八千代にさわれ石の巖となりて苔
のむすまで命ながらへて雨塊を破らず風枝を鳴らさじとい
へばまた堯舜の御代も斯あらむかほと治まる御代なれば千
草萬木花咲實のり五穀は國にみちくして上には金殿樓閣雲
をならへ下には民の竈賑ひて仁義正しき御代の春蓬萊山と
は是とかや君が代の千とせの松も常磐色かはらぬ御代のた
めしには天長地久と國も豊に治まりて弓は袋に劍は箱に藏

め置く諫鼓音深ふして鳥もなか／＼驚くやうぞ無かりける。

○臺灣入

西村天因氏作歌

すめらぎの御稜威は四方に輝きて清國遂に和議を請ひ臺灣
島を献上し合戦こゝに治まれる君が御代こそ目出度けれ臺
灣島の土賊とも龍軍に向ふ蟻螂の斧をふるふと聞へしかば
征討の師をぞ遣はさる近衛兵の精銳を率ゐて御渡海召され
しは陸軍中將大勳位北白川宮とて金枝玉葉の御身なり三貂
角の御上陸幕營ありし其跡に木を削りてぞ記さる炎熱燬
くが如き日に三貂大嶺の險阻をば馬にも召さず越え給ひ大
雨頻りに降る時も濡れにぞぬれて進まる士卒之に感激し

病兵さへも立上り命を惜まず進軍す所々の砦に籠りたる賊兵共の射出す彈丸は雨か霰かしら雪の降り注ぐが如くにて砲煙暗く天を蔽ひ百雷均しく墜るに似たり宮は矢石を侵しつゝ突貫せよと下知あれば川村少將兒玉大佐を初とし勇みたつたる近衛兵我先にと奮戦し賊の本營に突いて入る賊兵之に氣を吞まれ右往左往に遁散りて降参する者數知れず大砲小銃の戦利品山を築かん許にて勝鬨とつと揚げければ宮は此時ゆうくとして基隆城へ入らせ給ふ斯て六月十日には臺北城を陥し入れ七月新竹を占領し明くる八月には彰化臺灣兩府を定め十月の初めつ方臺南さしてぞ進まるゝ天暑うして瘴癘多く地險峻にして糧道絶え千辛萬苦の其中に宮

は士卒と食を頒ち晝は汗馬に鞭を當て夜は荒野に露營して戎衣の袖に月を宿し唯君の爲め國の爲め平定の策を運し給ふ嗚呼痛はしや悲しやな竹の園生の御身にて餘り艱苦を積ませられ遂に御病に罹らせ給ふ日々に重らせ給ふに依り御供の人々打驚き都に歸らせ給ふ様切に御諫め申せども宮はいつかな聞し召さず我官軍の將として賊徒平定を見ぬうちはたとひ臺灣の土となればとて我のみ士卒を打捨てて争てか都に歸らんと籠に召されて進まるゝ御臨終の其際に賊徒平定と聞し召し宮は莞爾と打笑みて萬歳と唯一聲叫び給ひしばかりにて敢なく天に昇らせ給ふ傳へ聞く日本武の古事を今日の前に見參らせて國中の民も兵も慟哭せぬはなかり

けり、さはさりながら、昨日、今日とは思はねど、老少不定に貴賤
なし、唯人は名こそ惜しけれ、皆人は名を千歳に残せかし、臺北
攸々仁政成、皇軍到處沸、歡聲、旭光將蒙、臺南、地彼戮、巨魁安、
萬生、と宮の謠ひ給ひし如く、盛功偉烈後の代に輝き、渡りて、曇
りなく、北白川の水は逝て歸らねど、月影清く澄み渡り、光は世
々に流るらん、光は世々に流るらん。

○小敦盛

初段

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、生者
必滅の理をあらはし、驕れるもの、久しからず、貴き人も遂に
亡ぶる、習あり、されば、此度源氏平家の戦に、平家方の一族、母衣

大將のそのうちに物の哀れを留めしは、無官の太夫敦盛にて、
諸事の哀れを留めたり、敦盛其日のいでたちは、いつに勝れて
花やかに先づ肌よりは、梅の匂ひの肌寄に、唐くれないを召さ
れたり、練絹に種々の糸を以て、秋の野の草づくしを、縫出した
る、薄紅梅の直垂に、弓手のてつかい、兩面の脛當に、萌黄おとし
の鎧着て、鉄形打たる兜の緒をしめ、鎌倉作の太刀を帯かせ、二
十四さしたる染羽の征矢を負ひ、塗籠籐の弓を持ち、連錢あし
毛なる駒に、梨地の蒔繪したる、白ふくりんの鞍を置かせ、御身
かるげに召されしは、さも勇々しくぞ見えにける、御一門とお
なじく、主上の御供をめされ、濱に下らせ給ひしが、敦盛御運の
末の悲しさは、御父經盛卿より譲り給ひし、さいださいへる漢

竹の横笛を、内裏に忘れたまひしが、若君様の悲さは、捨てても御出あるならば、斯程の事はあるまじに、敦盛此笛を忘れおく事は、平家末代迄の耻辱と思召し、取りに歸らせ給ひしが、斯様斯様に、時刻を移す其暇に、御一門の御座船も、兵船も、遙の沖に押し出す、痛はしの御事や、敦盛は、詮方なくも、鹽屋の方を心がけ、駒に任せて落させ給ふ、心の中こそ哀れなれ、是は扱置き、こゝに、又、武藏の國の住人、篠黨の旗が、し、ら、熊谷の次郎直實は、此度一の谷の合戦に、先陣を承はれと、未ださまでの功名も極ず、無念至極は無かりけり、あツばれ此處に勇士の通れがなよき敵もあらば、押並び、引組んで功名せば、やと思ふをりふし、敦盛を目にかけ、駒引よせ、打乗りて、濱邊をさして、急ぎ行く、直實や

かて、大音を揚げて、名乗る様、それに落させ給ふは、平家方にて、もよき御大將と見奉る、斯く申す某は、武藏の國の住人、篠黨の旗頭、熊谷次郎直實と申す者なり、源氏方にても、隠れなきよき敵にて候きたなくも、敵に後を見せ給ふやないざ、引返し御勝負候へ、見參せんと、扇を揚げて招かる、痛はしや、敦盛は、熊谷とは聞きながら、落る味方の兵船に、心がけ、駒を早めて急がる、さる程に、敦盛遙の沖を御覽するに、御座船間近く寄せければ、斜ならずよろこび、腰より日の丸の扇を出し、沖なる船を招がせ給へば、船中の人々、其中に、門脇殿は御覽じて、伊賀の平内左衛門基國を召され、いかに基國あれを見よ、母衣掛武者の船を招くは、左馬頭行盛か、又は無官太夫敦盛か、いづれも見よとの

御掟なり。悪七兵衛景清承はり、某見定め申さんと、白柄の薙刀
おつとり杖につき、舷につつ立あがり、兜を傾け磯邊の方をつ
くく、と打まもり、嗚呼痛はしの御事や、何とて御座船に召後
れさせ給ふやな、参議經盛卿の御子息無官太夫、敦盛卿にて渡
らせ給ふ御馬の毛色、鎧の袖印に至るまで違ふ所はましまさ
ぬ、嗚呼痛はしやと申上れば、門脇殿聞し召し、敦盛ならば此船
を早く磯邊に寄せよとの御掟なり、水主揖取かしまり、俄に
櫓かちを取直し、船を磯邊に寄せんとすれど、此中より吹つゝ
きたる北風の烈しきに、名残の浪は今日も立ち、風は競ひて、浪
は香車の如くなり、白浪世界をあばき、眞砂も天に揚ければ、宛
然雪の山の如くなり、小船ならば自から、弓手妻手にも押廻さ

るゝものなるに、殊に勝れし大船に、しかも大勢は召されたり、
次第くに出れども、逆巻く浪にせかれつゝ、磯邊に寄すべき
様は更になし、敦盛は此有様を見て、最早叶まじと、駒を泳が
せ、船に乗らんと思召し、駒の手綱をかい、くつて海中へさつと
駆入り、浮きつ沈みつ、一反ばかりは出たりしが、駒逸物とは申
せども、逆巻く浪にせかれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける、直實
此由見るよりも、大音あげて、呼はる様いかに、平家方の御大將
御座船遙に程を隔てたりしかも、浪風烈しきによも、逃れさ
せ給ふまじ、いざ引返し、御勝負候へ返し給はぬものならば、某
射て参らせんと、弓と矢を打つがひ、坐るに引てかゝりける、敦
盛は駒の手綱を引止め、此處を逃れんとせしに、斯く逆の極ま

る上は若しも源氏のさび矢に射とめられなば平家末代の耻辱と思召し、いざ此處にて勝負を決せんと、合圖をなして、駒の手綱を引返し、海中よりさつと駈上り、染羽の鏑矢打つがひ斯いとぞ詠し給ひける。

梓弓矢をさしわけて引くときは

返すころを知るかその君

と遊ばし給へば熊谷も心ある弓取なれば、はつと心にこたへ、

双の鏑を蹶張して、やがて返歌に

いたづきのはや外れんと思ひしに

矢といふ聲に立ちぞとまる

と返歌をなして、心静に待ちにけり。

二 段

さる程に教盛は、頓て打物の鞆を外し、熊谷に打つて掛れば、直實確かと受止め、追ひつ追はれつ受けつ流しつ、火花を散して、二騎並んで、面も振らず、斬り結ぶ、未だ勝負も見えざるに、教盛いざ組まんと、打物彼方へなげ捨て、駈寄るを、直實共に、打物投捨て、馬上ながらむつと組み、互にかはす聲のうち、一度に鏑を踏はづし、両馬が間にとつと落ち、上を下へと返しける、痛はしや、教盛は、心は、猛く勇めども、剛氣の熊谷物の數とも思はねば、教盛を心よく取て押へ、首をかゝんとしけれとも、餘り手弱く思ひ、さしうつむいて、御相恰を見奉るに、薄化粧に、鐵漿黒の有様は、殿上人の年のころ、十四五ばかりと打見えて、容顏殊に麗

はしく熊谷餘りの痛はしさに少し打寛げまゐらせさては平家方にてはいかなる御公達にて渡らせ給ふやな御名字を名乗せ給へと有ければ敦盛は熊谷に組しかれながら世にも苦しき息をつきさてはなかく熊谷は文武二道の勇士とは聞つるに何とて合戦に法なき事を曰ふやな我は天下の朝臣として雲閣の座に連なり詩歌管絃の道には長じたりし身なれども此三歳がほとは一門の運盡きはていとあこがれしより武士のいさめる道をあらく承はるに夫れものふの名を名乗るといふは互の陣に群がりてやなくひ箆を腰に附け互に打物抜き持ちて我は何國の何某と名乗りてこそ勝負は致すなれ我は今敵に組み敷かれ下より名乗るといふは今ぞ初

めて承はる熊谷とありければ直實聞いて仰せは然なれと首を取り武藏に歸り此直實が譽を顯さん其爲めと言へば敦盛仰せにそれは隠れもあるまじ唯某が首を取り汝が主の義經に見せ給へ若し義經見知らずば蒲の冠者に見せ給へ蒲の冠者も見知らずば此たび平家方生捕の者多くあるべし彼の者共に引向ひ誰が首ともわからずば其時こそは名も無き者の首ぞと思ひた草むらに捨て給へさのみ物を尋ぬるやなはや首取れや熊谷とありければ直實承はり扱は武士の勇める道を委しく知ろし召るよな世に物憂き者は我等にて候君の仰にしたがひ御首取らんとすれば親と合戦子と争ひ花の下なる半日の影月の前なる一夜の友清風朗月飛花落葉の如し

此度の合戦に熊谷が参り會ふことは前世の宿縁と思召し御名を名乗らせ給へ唯奉公の其うちに後生を吊ひ申すべしとありければ敦盛は名はいつまでも名乗るまじとは思へども後生を吊はれん其嬉しさにいかに熊谷我を誰ごか思ふらん我れこそは葛原親王九代の後胤門脇が二男参議經盛が末子無官は假の名にて大夫敦盛とは某なり今年齡は十六歳軍は今日が初なり早や首取れや熊谷と宣へば直實涙を流しさては經盛卿の御子息敦盛卿にて渡らせ給ふやな御年は十六歳某が一子小次郎直家も今年歳は十六歳さては御同年にて在すや直家も今度一の谷の戦にさきがけ致し弓手の腕に矢を射られ某にうち向ひ此矢抜て給はれと申せしに如何に直家

敵と味方の其中にて餘り心弱くて如何せむ若しも其手が深手ならば駒より下りて自害せよ又薄手ならば敵と引組んで打死致せ篠黨の名を汚すなどじつと覗みしが其時某が方を一目見て敵の陣所に駈入るを後姿を見しばかり今二目とは見ざりけり此直實がつれなき命をなからへ武藏に歸り直家が討たれたると云は誠に母が歎くへし況てや經盛卿にも華に増したる若君を磯邊に一人御殘し無や嘆かせ給ふべし直實が恩賞に預かればとて千歳の齡は保つまじ末代迄の物がたりに助けばやと思ひいかに若君平家方に御歸せられて武藏國の熊谷と引き組んで候ひしが我子小次郎に思ひかへ助け参らせ候と御父經盛卿によく御物語候へと云ふよ

り早く引立て、鎧につきたる塵打拂ひ、駒に打乗せ奉り、直實共に駒に打乗りて、四五町ばかりは見送りしが、後の山に潤の聲をとつと揚ぐ、誰ならんと見返れば、弓手の方には、森田平山控へたり、妻手の方には、虎江殿續いて、佐々木四ツ目の紋の旗を押立て、上の山には、御大將九郎判官源義經白旗をなびかせ、御膝元には、武藏坊辨慶、龜井片岡伊勢駿河源氏の一族、聲々に、武藏國の熊谷は、敵と引組んで候ひしが、已に組敷ながら助くるは、必定逆心と覺えたり、二心あらば、熊谷共に打取れと、聲かけられて、直實は、せん方なくも、又も扇を揚げて、招きよせ、いかに若君あれを、御覽候へ、如何にもして、御身一人は、助け参らせたくは、候へど、味方の軍勢、雲霞の如く、満々たり、よもや逃れさせ

給ふまじ、あはれ直實が手に掛け奉り、後の世の御追善を、營み申すべしとありければ、敦盛も涙を流し、此處を逃れ、落行先にて、若し賤しき者の手に掛り、面をさらさんは、無念なりかほと、義理ある武士の手に掛り、死する命は、惜からず、早首取れや、熊谷と、西に向つて、掌を合せ、覺悟極めておはしけり、鬼を欺く熊谷も、いづくに太刀を立つべくとも、覺えず、唯途方に暮れてぞ居たりける、やぐら番所の前なれば、直實是非に及ばず、水もたまらず、敦盛の花の首を打落す、さしも剛なる直實も、心は亂れ、氣も消えて、暫しが程は、死骸に取付、涙に打伏し、泣さけぶ、弓矢取る身の衰れにや、漸々心を取直し、頓て死骸を引立、見るに、鎧の引合せの弓手の脇に、巻物一卷挿れたり、妻手の脇には、かん

竹の御笛に扇を添へて差されたり彼の巻物を開き見るに、教盛の都落のこと委しく記しめされたり。頓て教盛の死骸を葬り奉り、御首笛巻物扇を取りあげ、駒引き寄せ打乗りて、大音揚げて呼はる様、平家方の一族母衣大將無官の太夫教盛を、武蔵國の熊谷直實が討取つたりと、勝鬨をとつと揚げ陣所をさして引て行く。頓て教盛の首を、義經公御實檢ありて、後は直實に賜はる直實首を押し戴き、最早是迄なりと思ひきり、弓の絃ふつと切放ち、太刀は固より弓矢を捨て、髻斷つて、武士を捨て、鎧の袖を墨に染め、新黒谷に引こもり、法然上人の弟子となり、其名を蓮生法師と様をかへ、三歳が程は終夜百萬遍を唱へ、教盛の追善を營みける、これも教盛最期の時、一言の言葉のかは

しある故に、武士の情もあるぞがし、世のなかは何を聞いても唱へても、憂きは世の中つらきは教盛、義理は熊谷物の哀れを留めしは、無官の太夫教盛にて、蓮生法師の後の歎きて、諸事の哀れを留めたり。

○芙蓉峰

吳竹の世に逆らはず阿容らず高く聳えて動かぬは、我が日の本の富士の山、あらびあらぶる神風も吹倒し得ず、岩がねをくだかむ雨も流し得ず、嚴然たる其氣象、凜乎たる其威儀を、仰ぐ懐慨悲憤の士、拳を握り牙を噛み、われは人なり此さまになどか劣らぬ大御代の事なき時に、此氣象、養ひ置て我國に讐なす醜夷の有る時は、腰間三尺の秋水を、拔手も見せず、切り拂ひ進

むで彼れが名に誇る、ソラタ山なりエトナ山、苦もなく取つて
我が富士の眞名子となして呉れむずと、日本橋頭に駒を立て、
富山をにらむありさまは、實に雄々敷ぞ見えにける、嗚呼此英
氣を鼓舞せしは、ひとへに富士の徳とかや、偏に富士の徳とか
や。

○王照君

問はず語り、誰聞けとてか打わぶる、身の憂を知れ山時鳥軒の
草忍ぶとすれど秋更けて、齡はてたる虫と我かな、夫れ一生の
別れには露の命も惜からず、風に任する窓の燈火、悲み滑髓に
徹り來て、容は憔悴と衰へて、唯何事も妹脊の契り、淺衣の薄き
縁となり果て、哀れはかなき我身かな、一度君に別れては、ふた

とび相逢ふ事もなし、隔て盡せし千山萬水の雲、終夜心に掛け
て思へども、君に逢ふ夜の夢だにも見ぬ、今世の中に物思ふ身
は、我等ばかりと思へども、昔を傳へ聞くときは、王照君の其古
は、漢の帝の美人にて、御寵愛は類ひなし、殿上にても並び無く、
まことに雲の上人にて、さしも優しく御坐せしが、如何なる
人の讒言にや、胡國と云へる遠國のるびすの在所に、流され給
ふぞ、哀れなる痛はしや、王照君今は早や、住み慣れし花の都を、
涙と共に立出づる、或時は船に召され、又或るときは、殊に峻し
き山を越へ、餘り我身の悲しさに、駒の上にて琵琶をも弾じ、古
郷戀しき歌の曲さま、朗詠し給へば、風聲水音ことごとく、
皆腸を斷つとかや、今は帝も聞し召し、御愁歎の餘りにや、忝な

くも龍顔に御涙浮ばせ給ふぞ有難きされと又綸言汗の如く
にて再び召返さる沙汰もなし彼れは唐土これは我朝又は
胡國夷の朝に春は藁屋の夜の雨乾坤萬里と隔つれど物思ふ
身は異らず流れも同じ水なれど淵瀬と變る如くなりた何
事も杜鵑血に泣いて何ぞ腸を斷ざる者やあらんと暫し口を
結んで唯三春を過さむにはよしなかりける。

○七 卿落

世はかりごもと亂れつ、茜さす日もいとくらく蟬の小川に
霧立て、へだての雲となりにけり、あら痛ましや玉さばる内裏
に明暮宿直せし實美朝臣に季知卿壬生澤四條東久世其外錦
の小路殿身は浮草の定めなき旅にしあれば駒さへも進みか

ねてはいばるつ、降りしく雨の絶間なく涙に袖は濡れはて
、是より海山淺茅原露霜分て蘆がちる難波の浦に焼く鹽の
からき浮世は物かはと行かむとすれば東山峰の秋風身にし
みて朝な夕なにきなれし妙法院の鐘の音も、牙て今宵は哀
れなり、いつしか暗き雲霧を拂ひつくして百敷の都の月をし
愛給ふらむ。

○武藏野

島津日新公作歌

武藏野に草は種々多けれど摘菜にすれば扱も少し、皆人は若
き時より唯徒事に日を暮す才智盡なき人は寶の山に入り
ながら空しく歸るが如くなりたま、此世に人間衆生と生

れ来て、眞如の玉を磨かずば、人と生れし甲斐もなし、人よりは
淺く思はれて、唯犬の老ひたる如くにて、朽果るこそ無念なれ、
又いつの代の何時の時に、か磨くらん頼まれぬ代にもあるか
な月鼠、そよぐ草葉の露の身なれば、縦ひ高位長者の身となり
て、七珍萬寶みちく。て、榮華に誇る樂みも、一夜の夢の如くな
り、歡樂極まりて、哀傷多しと、古人の書にも記さるゝさればに
や、生々世々の樂みも、心の沖の月や花、これを樂む人もなし、會
者定離、生者必滅の世の習ひ、春去り秋は蟬の聲、さても果敢な
き浮世かな、世の中を思へば、夢か稻妻の、ちらとする間の語ひ
も、慳貪愚痴は迷ひなり、嗚呼引寄せて、結へば草の庵にて、解く
れば、もとの野原なり、少しきを足れりとも、知れ、滿れば月も程

なく、磨て行く、十六夜の空や、人の身の上と知られたり。

○兒島高德

元弘二年如月の、小雨しく、笠置山あやめも分かぬ夜の風
に、さして行手も楠の蔭だに見えぬ常闇に、荒渡りたる人面の、
心は鬼か蛇の如き、妖怪變化の賊共は、恐れ多くも、天皇の車駕
を西の隱岐の海、海路遙に遷しけり、其有様は今も猶、史に見
るだに、身の毛立つ、腸さへも寸々に、絶入るばかりうるむ目に、
古觀む外ぞなき、其時兒島高德は、衆を集めて言へる様、仁を爲
すため、身を殺し、義を見て爲すは、勇なりと、勸ます言葉、勸む武
士共、向ふ船阪の山の險阻は、此れやこれ、天の與へし要害と、
身を潜めつゝ、堅睡のみ、我天皇を奪はんと、待つに、甲斐なや、鳳

葦ははや山陰に向ひぬと聞くより早く杉阪の樹の根岩の根踏碎き望めば又も鳳葦は遙に過ぎて後影僅に拜むばかりなり、今ぞ挫けし兵ものゝ後見送りて高德は天を睨みて地に哭し、姿をかへて身をやつし、風の晨も雨の夜も厭はず御跡慕ひつゝ、善き折あらば赤心を我天皇に聞え上げ、叡慮を安んじ奉らんと、氣の張弓は撓まぬも守り厳しき板びさし、かけさへ洩らぬ龍姿に、さし足拔足日本刀、櫻の老樹搔き削り、墨斗の墨の黒々と、赤き心を書き下す。

天莫空勾踐。時非無范蠡。

十字の文字は長城の堅き固めや勤王の記しも賊は明き盲目、群り見るも明がらす阿呆くくと笑ふのみ、我が天皇の龍顔は、

いと麗はしく暫しの間、愁の御眉開き給ふ、斯の如くに高德が、虎の穴だに恐れずに、虎の子得んと思ひてし、勳は後の世に迄も輝きわたり曇りなき、明治の御代に愛國の古きを温ね祈しく、護の神と崇めらる、讀む人々よ心せよ、彼れも人なり我も人、食ふは今も昔も同じ、日本に實のる瑞穂なる、飲むは昔も今も將た、清き日本の國の水、卑屈の腸洗ひ去り、國を枕に誠忠の樂い、き夢や結ぶらん。

○俊基朝臣東下

落花の雪にふみ迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行末を

も知らず遺し置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今
を限りと頼みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあわれなる、憂
をば留めぬ逢坂の關の清氷に袖濡れて、末は山路を打出の濱
沖を遙に見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身を浮船の浮き
沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、瀬田の長橋打渡り、行きかふ人
に近江路や、世のうねの野の鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、
時雨もいたく森山の木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠
分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとも、泪に曇りて見へ
わかず、物を思へば、夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとゞめ
て、ながむれば、故郷を雲やへたづらん、番場醒ケ井柏原、不破の
關屋はあれはて、猶ほもるものは秋の雨の、いつか我身の尾

張なる、熱田の八劍ふし、拜み、鹽干に今や、鳴海瀉傾く、月に道見
えて、明けぬ暮れぬと、行く道の末はいづく、と、遠江、濱名の橋の
夕汐に引く人もなき、捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か
あはれと夕暮の、入相なれば、今はとて、池田の宿につき、給ふ、元
暦元年の頃か、とよ、重衡中將の、東夷のために捕はれて、この宿
につき、給ひしに、

東路のはにふの小屋のいぶせきに

故郷いかに戀ひしかるらん

と、長者の娘が詠みたりし、其の古の哀れまでも、思ひ起せば、只
獨り先だつものは、涙なり、旅館の燈火幽にして、雞鳴曉を催せ
ば、匹馬風に嘶きて、天龍河を打ち渡り、小夜の中山越え、行けば、

白雲路を埋み来て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みて、
も昔西行法師が命なりけりと詠じつゝ、二度越えし跡までも、
うらやましくぞ思はれける、隙ゆく駒の足はやみ、日既に亭午
に上れば、餉まるらするほど、と、奥を庭前に昇き止む、轡を叩
きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すな
りと答へければ、承久合戦のとき、院宣書きたりし、谿に依りて、
光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水。 汲下流而延齡。

今東海道菊河。 宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れや
いとまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける、

いにしへもかゝるためしを菊河の

同じ流に身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都に在りし谿を聞きて、龜山殿の行幸の、
嵐の山の花さかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍り
しことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゝ、き給ふ島
田藤枝にかゝりて、岡部の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮に、宇都
の山邊を越えゆけば、蕪楓いとしげりて、道もなし、昔業平の中
將の住所を求むるとて、東の方へ下りしに、夢にも人に逢はぬ
なりけりと、詠みたりしも、斯くやと思ひ知られたり、清見瀧を
過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ浪の關守に、いと涙
を催され、向はいづこ三保ヶ崎、興津蒲原打ち過ぎて、富士の高

嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙上なき思ひにくらべつゝ、
明くる霞に松見えて、浮島ヶ原を過ぎ行けば、潮干や浅き船う
きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車が、へし竹の
下道ゆき悩む足柄山の嶺より、大磯小磯見下して、袖にも涙は
こゆるぎの急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十
六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。

○母の誠

吉水經和翁作歌

木の葉みな身にしむ風にさそはれて、散りて行手の山は瘦せ、
軒端あらはに見え渡る草の家、居に夜は更けて、糸繰る音の幽
かなる山の端高く月冴て、かどの板橋霜白し、傾く窓のともし

火は夜なく、細く輝きて、紡ぐ車を照すなり、頭にいたゞく白
雪は瘦せたる顔に降りかゝり、老たる身にはさゝがにの糸と
る業の苦しさも、出て戦ふおのが子の苦勞を思へばいと輕し、
綱引する舟の夜寒を身にしみて

寝られぬ妻や衣うつらむ

と漁る人を思ひやり、ねられぬ妻が寒き夜に、衣を打て夜を明
かす、これとかわれと愛情の心は同じ、母親は我子の困苦を忍
びかね、指先凍る冬の夜も、厭はで紡ぐ健氣さは、是も同じ、國
のため、又大君の爲ならむ、たつ霜柱踏み分けて、朝なく、に母
親は、鎮守の神に、武運をば、我身にかへて、祈りけり、赤心こめて
の祈願には、神もあはれと思召し、勳功を立させ給はんは、鏡に

かけて見る如し、紡ぎし糸を布となし、送りし先は大丈夫が深
手淺手の差別なく、包むたつきとなりもせん、恐れ多きことな
れど、皇后陛下の御心に、つゆほと叶ふものならば、老の身にと
りこよもなし、あしびきの山の奥なる草の舎に、老朽果し女さ
へ、思ひくの業をもて、國に盡さむ、赤心を思へば、猛き御軍の
前に立べき敵なきは、今更いふもおろかなり、今更いふもおろ
かなり。

○蛾 蛾

熟々有爲天變の世を觀するに、花も紅葉も一さかり、況んや人
も一盛り、人の齡が花に似て、咲くは遅く、散り易し、散行く花
は根に還る花は散りても幹さへあれば、又來る春は枝に戻り

て、匂ひ來る鳥も古巢に歸るといへど、夫れ人間は死して再び
後に歸らん、死出の山古の如何なる人の踏そめて、行くも歸る
も迷の深き涙川、親の別れに子を連れず、又子の別れに親そは
ぬ、獨り生れて獨り行く、唯冥土のいとなみを疑ふ心のあらず
して、常に唱へし念佛は、是が淨土の寶なり、されば爰に一つの
譬あり、蜘蛛といふ虫は、いかなれば、己が姿でなき虫を、それを
我巢に集めつゝ、心盡して祈りせば、我に似るとあるぞかし、我
等如き迷の深き衆生も、かほとに深く祈りなば、などか驗の無
かるらん、維心の淨土、己身の彌陀と聞く時は、十萬億土の極樂
も、こゝを去ること遠からず、皆人は此理を知らず、罪つくるこ
そ果敢なければ、罪は來世の火の車、善は淨土の蓮なり、たま

此世に、人間衆生と生れ来て、後生前生を願はずば、誰も浄土に
浮ぶ瀬は無い。

○川中島

吉水經和翁作歌

天文二十三年、秋のなかばの頃かとよ、上杉謙信は、八千餘騎を
從へて、川中島に打て出づ、われ此度の戦は、武田信玄を追つめ
て、親しく雌雄を決せむと、渦巻かへす犀川を渡りて陣をぞ取
にける。信玄は此事を聞くより早く、二萬餘騎にて打むかひ、岩
をかためて戦はず、謙信は氣をいらち、村上義清に言ひ含め、月
影くらき山々の草葉の露をわけさせて、彼方此方に兵を伏せ、
樵夫に擬せし兵ものを、出して甲斐の兵營に近づかしむれば、

甲斐の兵、策略とは露しらず、朝霧の間に追まくる、待設けたる
伏兵は、時こそ來れと、勝鬨をとつと揚げつゝ、引包み袋に物を
取る如く、一騎も残さず、打取たり、信玄怒て軍勢を、雲霞の如く
に繰出せば、謙信も備を立て、打向ふ、龍躍つて雲を起し、虎嘯
ひて風を呼ぶ、勢ひ破竹の如くにて、入り亂れ、攻め戦ふあ
りさまは、颯風砂を巻き、百雷岩を抜くに異ならず、越後の勢退
けは、甲斐の軍之を追ひ、甲斐の軍退けば、越後の勢之を追ふ、兵
を合すこと十七度、いづれを勝としらま、弓ひくか、と見えし、信
玄が一手の勢の、幟を伏せ、川を渡りてよしあしの、ひまを潜か
に忍ばせて、勇み立たる謙信の、旗本近くすゝみより、面も振ら
ず、切て入る、旗本の軍勢は、思はぬ兵に破られて、走る後より、甲

斐の兵、鯨波を作つて追かくる。宇佐見定行是を見て、猛虎の如く憤り、憤馬を驅て大音に我が手の勢に下知をなし、敵の横合より、無二無三に突入て淵瀬も言はず追落す。信玄度を失ひて流れを亂して走る所を、謙信唯一騎赤栗毛の逞しきに鞭をあて、豎子いづく迄逃るぞといひも果さず切りつく。信玄刀を抜くに暇なく、軍配扇にて受たれど、扇は二つに折られたり。降ると見て傘とる暇もなかりけり。

川中島の夕立の雨

と謠ひし如く二の太刀は、はや肩先に切り込みぬ、あつといふまに信玄の命は岩にくだから、泡と消えなむ危きを、救はむとして軍兵が心は矢竹に速れども、水駛くして近よれず、大將

原大隅槍をのぼして謙信を突はしたれとあだづきし。斯てはならじと槍を揚げ、唯一打にと打たりしに、馬にあたりて馬逸す。謙信馬をしづめむと、手綱搔繰る其隙に、信玄は、虎口を遁れ去りにけり。

鞭聲肅々夜渡河。 曉見千兵擁大牙。

遺恨十年磨一劍。 流星光底逸長蛇。

斯く信玄を打もらしたる謙信が、心の中は如何ならむ思ひや、るだに哀れなり、信玄は、肩の痛手に堪かねて、其夜の中に軍勢を纏めて出る月影に、道を求めてはるく、とわが故郷に歸りけり、わが故郷に歸りけり。

○那須與市

四國屋島の荒磯の濱にて源氏平家の戦ひに源氏方弓矢の響
 れ、今が世までも記るさるゝされば平家方より沖なる船に年
 ころ十八九許と打見えて女官とも覚えしが花やかなる装ひ
 にて船の表に立上がり扇を的に立て、陸に向つてぞ招かる
 源氏の大將義經公御覽召れ、數多の人を御側に召れ如何に
 汝等あれを見よ、沖なる船に扇を的に建ければ、鬼にも角にも
 射では叶ふまじと宣へと沖に立てたる的なれば、誰とて御請
 申す人更になし、爰に下野の住人那須の與市、宗高は名を得た
 る弓取なれば、義經公宗高を御前に召れ、いかに與市彼の扇を
 射よと宣へば、與市うけたまはり再三辭退申上りければ、義經公
 是非に射よとの嚴命なり、與市今は辭するに言なく、直に御請

いたして、御前靜に下りけり、宗高本年十九歳常に勝れて花や
 かに緋威の鎧着て、鉄形打ちたる五枚兜の緒を締め、白檀磨の
 脛當に兵庫鎖のこてを貫き、年は五歳の眞黒名馬、梨地の鞍に
 紫手綱、滋藤の弓を持ちて、二十四さしたる切負の征矢を負ひ、
 其身輕げに乗たる出立は、さも勇々敷ぞ見えにける、頓て浪打
 際に乗出し、沖なる船を見渡せば、間二町許と打見えて、名濊の
 浪は音高く、風は競ふて、浪は香車の如くなり、的は定まらず、射
 るにも射られぬ次第かな、されとまた、武士の御請致せし上か
 らは、鬼にも角にも射では叶ふまじと、直に小松原に駈上り、駒
 より飛下りて、那須八幡を伏拜み、某が七十五迄の命ならば、六
 十五まで、六十五の命ならば、五十五まで、五十五の命ならば、四

十^五迄^に身^命を^縮め^沖なる^的を^射さ^しめ^給へ^と祈^る心^の中^に
 の^不憚^さよ^神も^納受^まし^まし^て十^二方^を的^一筋^に打^守れ^よ
 との^御託^宣あり^ければ^宗高^は駒^引寄^せ打^乗り^海中^へ颯^と颯^と
 入^り浮^きつ^沈み^つ一^町許^は乗^出し^が駒^逸物^とは^申せ^とも^逆
 卷^く波^にせ^かれ^つ泳^ぎか^ねて^ぞ見^えに^ける^矢頭^は少^し遠^く
 け^れと^弓と^矢と^打交^ひ矢^聲を^かけ^て放^ちけ^る其^矢は^あや^ま
 た^ず扇^の要^許より^ふつ^と射^切り^扇は^空へ^舞上^り又^海中^に颯^と
 と^落け^れば^平家^は船^を叩^き陸^には^源氏^繼を^駢へ^船を^叩いて
 感^じけ^りさ^{れば}平^家は^敗軍^と極^まり^て西^國さ^して^落ち^にけ^り
 り^宗高^は高^名數^多あ^れど^かほ^どの^高名^は始^にて^其名^を末^代
 に^輝す^源氏^の御^代こ^そ目^出た^けれ^ど

雲^に登^ゆる^高山^も登^らば^など^か越^えざ^らむ^空を^浸せる^海原^も
 も^渡ら^ば終^に渡^るべ^し我^が秋^津洲^は茜^さす^東の^海の^はな^れ
 島^たと^へば^海の^た中^に浮^べる^船に^さも^似たり^二萬^方里^の
 船^の中^四千^餘萬^の乗^組あり^船の^主の^指揮^を受^け文^明海^に進^み
 み^行く^水主^楫取^多か^るに^われ^らも^楫子^の一^人なり^船の^行手^は
 は^和田^の原^八重^の沙^路の^遠け^れば^はや^て逆^卷折^もあり^高浪^荒
 荒^る時^もあり^船手^の業^に習^はず^ばは^やて^高浪^凌ぎ^得て^思
 ふ^港に^いか^で着^くべ^き

○國 船

木村 弦雄 氏 作 歌

○墨 繪

心とは何をいふらん不思議さよ、墨繪に書きし松風の音、況んや此世を、諸法實相と聞くときは、峯の嵐も法の聲、邪正一如と観る時は、迷も悟も無かりけり、萬法一如と観ずれば、俗の朽木も皆佛、更に不審は無かりけり、三界に身は安からん、小車の我、惡業に引かれ來て、錦の紐もいつか解くらん、四つの邪の、一つ箱にたゞまれて、いつも苦しき貪慾の、深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき、我が身一つを如何せむ、夫れ人間の習ひにて、昨日の迷を、今日悟る、いかに悟りし人とても、明日は迷ひし事もあ、る、人の上とて、さのみ言ふては如何せむ、物の報は物毎にある、うもれ木に、如何なる花や咲ぬらん、實になりてこそ思ひ知らる、れ、豫て後生を思ひ知れ、生は死の本、逢ふは別れの初ぞとて、

誰も言ひける言の葉なれど、昨日今日とは思はざりけり、皆人は時に至りて、歎き哀み、袖に露をくばかりなり、生死烈しき世の中に、人には長く添はぬもの、唯何事も、腹は立ても言葉は殘せ、千歳此世に在る身の如く、煙貪邪見は諸事無益、僅か此世は假の宿氣はあさくと、心廣くも能く持ちて、法の道には誰も深かれ、極樂の唯一すらの法の道を誰に尋ねん、佛ならては知ろし召れぬ、佛とは何をいは間の苔衣、唯其儘の姿にて、慈悲より外に宿心は無し、是れに附けても皆人は、親子兄弟夫妻が中、又は朋友の中とても、此世ばかりの契なり、死して行く身の野邊までは、娑婆の情に、我も誰も供を致せとも、野邊より先は唯一人、先立つ者こそ哀れなれ、今日までは、人を送りて歸りしが、

何時又我は送られて人を返さぬ涙川幾瀬渡るも淵なれば御
法の船こそ戀しけれ是に附けて皆人は老若男女に至るまで
慈悲をも願へ慈悲萬行の功力に依りて死して後極樂の涼し
き風に浮べば御身成佛疑ひなし身は得脱の縁となるたゞ人
間の歎きの中に喜びとなる

○常陸丸

池邊義象氏作歌

征露の軍やうくに進みくつて南山の險阻も既に打破り音
に聞へし要害の旅順口も閉ざれて驚の接てふ滿洲も君が御
稜威の旗風に今は靡かぬ草もなし心つくしの島離れ玄海灘
のたゞ中に吹く汐風に日の丸の旗ひるがへす常陸丸佐渡も

續ひて進み行く船路の果は遠からむ何をあらふる荒汐の逆
巻く中の黒煙唯一すぢに走り來て我を取巻く敵の艦こは何
事と言ふ間なく亂射亂擊雨あられ進み遁れんひまもなし千
里を走る猛獸も水に入りては如何にせむ萬里をかける大鵬
も浪には翼折れぬべし心ばかりは疾れども運送船の悲しさ
は進退こゝに谷まりてせんかたなくも敵艦にまかせはてし
ぞ是非もなき佐渡は如何にと眺むれば霧にへだたりわかぬ
とも同じ様なる運の末輸送指揮官須知中佐是迄なりと思
ひけん大久保少尉の捧げたる聯隊旗をば手に受けて都の方
を伏拜み火を放ちて焼たれば各將校もとりに貴重品の
々焼捨てぬ無念の涙はらくと落るを袖に打拂ひ萬歳唱へ

ゆ。う。く。と。腹。か。き。切。て。ぞ。失。せ。に。け。る。列。な。る。將。校。始。と。し。下。士
兵。卒。に。至。る。迄。同。じ。枕。に。伏。す。も。あ。り。海。に。投。じ。て。死。す。も。あ。り。敵
彈。ま。す。く。加。は。れ。ば。甲。板。上。は。忽。ち。に。屍。の。山。を。築。き。つ。ゝ。流。る
血。汐。に。支。海。の。浪。は。朱。に。ぞ。染。み。に。け。る。哀。れ。は。か。な。や。常。陸。丸
君。萬。歳。の。聲。細。く。我。忠。勇。の。將。士。等。が。無。限。の。恨。う。ち。乘。せ。て。潮。の
泡。と。消。に。し。は。明。治。三。十。一。年。の。水。無。月。十。五。日。の。暮。つ。か。た。
夕。日。は。浪。に。落。ち。ざ。れ。と。霧。た。ち。覆。ふ。海。原。は。黒。白。も。分。か。ぬ。ば。か
り。な。り。げ。に。忠。烈。の。武。士。が。十。年。の。間。朝。夕。に。磨。た。へ。し。日。本。刀。
試。さん。敵。を。前。に。見。て。遺。恨。の。刃。一。太。刀。も。報。ひ。ん。こ。も。な。く。ば。
か。り。駒。の。蹄。に。滿。洲。を。踏。に。じ。ら。む。も。夢。な。れ。や。ウ。ラ。ル。バ。イ。カ。ル
打。越。え。む。あ。ら。ま。し。こ。も。幻。か。思。へ。ば。無。念。の。極。な。り。吁。一。聯。隊

の我勇士氷積屍と消えしかと國に殉ぜし日本男が清き其名
は萬代も響の灘に立つ波のたゆる時なく仰がれむ未まで遠
く流るらん。

○吉野落

吉水經和氏作歌

初段

みよし野の花の龍田の紅葉も夜半の嵐に誘はれてあだに散
ゆくときは又増して哀れに思ふなり茲に二階堂出羽の入道
道蘊は元弘三年正月に六萬除騎を従へて大塔の宮の日頃よ
り籠らせたたまふ大和なる吉野の城へぞ攻よする菜摘川のほ
とりより吉野の方を見上ぐれば白旗赤旗錦の旗御山おろし

に打靡き、雲か花か、とあやしまれ、麓には敵の大軍すき間なく、兜の星をかゝり、やかし、鎧の袖を連ねしは、錦を敷くに異ならず、峰高ふして道細く、山険しくして、苔滑らかなり、幾千萬の精兵が必死になりて攻むるとも、容易く落つべくとも思はず、かゝるところに、同じく十八日卯の刻より、兩陣鯨波をどつと揚げ、敵攻上れば、攻下ろし、互に勇氣をふるひつゝ、此處の谷間彼處の峯に馳せ、ちがひ、攻め合ひ、開き合ひ、射手を揃へて、散々に射立たれど、寄手の勢は皆命を知らぬ、坂東士親討たれても、願はず、主倒れても、取合はず、骸を乗越え、七日があひだ、息をも繼がず、攻戦ふ、血は草苔を染め、屍は路頭に横たはる、かゝるところに、寄手の案内者、岩菊丸は、足輕洪に下知をなし、金峯山の

險を越え、樹の根、岩角よち登り、在々所々に火をかけて、鯨波を作つて、攻ければ、城兵も今は前後の敵を防ぎ兼ね、自害する者もあれば、猛火の中に馳せ入つて死するもあり、向ふ敵と引組んで、刺し違ふる者もあれば、宮に注進するものもあり、大手の壕は忽ちに死骸を以て埋めたり、宮は此よし聞し、召し、緋滅の御鎧に、龍頭の兜を召させられ、三尺五寸の小薙刀を脇にはさみて、倔強の兵共を二十餘人、前後左右に卒ひ給ひ、群る敵に切て入り、砂子を飛ばし、煙を立て、東西を打拂ひ、南北へ追廻し、こゝを専途と戦ひ給へば、寄手の大勢も、此二十餘人に斬立てられ、て、風に木の葉の散る如く、四方へさつと散りにけり、宮はこれより、藏王堂の大廣間にゆくと引上たまひて、軍兵と最

後の御酒宴をぞ召れける。この戦ひに、宮の召したる御鎧は、七筋の矢に貫かれ、頬先と二のうでに、二ヶ所の突創負せ給へど、立たる其矢をも拔せ給はず、流るゝ血汐も拭はせ給はず、敷波の上に立ちながら、大盃を三度まで傾け給へば、木寺の相摸、四尺三寸の太刀先に、敵の首をさし通し、宮の御前に畏り、聲高らかに謠ふやう、戈鋌、劍戟を降すこと、電光の如く、磐石、山岩を飛すこと、急雨の如しと、雖も、天帝の身には、近づかず、却つて、修羅彼が爲めに破らるゝと、太刀振かざし、舞ひたるは、彼の漢楚の鴻門に、楚の項伯と項莊と、劍を抜いて舞ひしとき、樊噲に立ちながら、幕をかゝげて、項王をにらみし勢も、斯やと思ひ知られたり。

二 段

さるほとに、村上彦四郎義光は、餘り激しく戦ひて、敵に矢十六筋を射付けられ、篋中の節や袖摺の節より折れて立ちたるは、枯野に残る玉萩の風に靡くが如くなり、其矢を抜くに暇なく、宮の御前にひれ伏して、一の木戸は早や破れ、今二の木戸にて支ふれど、連日の戦ひに、軍兵共は皆打死し、逆も籠城、覺束なし、敵四方を圍まむ其中に、早く落させ給ふべし、臣は恐多きことながら、召させられたる御直垂や、御物の具を頂戴し、御諱をも冒し、參らせて、此處に戦死を仕らむと、忠義面に顯はれて、いと懇ろに申上れば、宮は哀れに思し召し、いかでかさる事のあるべきぞ、死なば處をかへずして、吉野の山にかむばしき名を残

さん^と宣^へば、義光聞もあへず、嗚呼、淺ましき仰かな、昔し漢の
 高祖が、滎陽に圍まれしとき、紀信高祖の眞似をなし、楚を欺か
 ると乞ひたりしに、高祖は之を許したり、是等の御覺悟あらせ
 られずして、天下の大事を、能くも思し立たれたり、早や御物の
 具下し賜れと、御鎧の上帶を解まつれば、宮も實にとや思しけ
 ゝ、御鎧も直垂も脱がせ給ひて、義光に、手づから渡し、宣ふやう、
 我れ若し生延びたらば、汝が後世を吊らはむ、又討死なしたら
 ば、同じ冥土に件ふべし、是れ今生の別れぞと、言葉すくなに宣
 ひて、涙ながらに落させ給ふ、義光もせきくる涙を押えつ、木
 戸の櫓に馳上り、大音揚げて名乗るやう、我れは是れ神武天皇
 より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部卿、尊仁親王

なり、逆臣ばらに惱まされ、恨を泉下に報ひんため、唯今自害す
 る所なり、之を見て、汝等が身に具へたる武運盡き、腹を切らん
 其時の、手本にせよと、呼はりて、鎧を脱いで、投げ落し、錦の直垂
 に、練貫のふたへ、小袖をひきくつろげ、諸肌脱ぎて、一刀を左の
 腹へくつとたて、眞一文字に引きまはし、朱に染たる脇を、櫓の
 板に投げ付けて、太刀先くわへ、俯伏に伏して、果てたる、義光が、
 最後のさまこそ、勇ましけれ、敵兵之を見て、大塔宮は御自害め
 されたり、御首たまはらんと、いふまゝに、四方の圍を打捨て、
 櫓の下に馳せ集る、宮は是と引ちがへ、天の川へと落ち給ふに、
 敵五百餘騎道を、遮りければ、義光の一子、村上兵衛藏人、義隆は、
 父の教に従ひて、一人こゝに踏止まり、追ひ來る敵の馬の諸膝

難ぎては斬りする平首打つては剝落し右へ突のけ左へ蹴倒
し飛鳥の如く飛び廻り猛虎の如くたけり立て九折なる細道
に敵五百餘騎を引受けて半時ばかりは支へしがいかに義隆
剛の者とはいへ其身鉄石にあらざれば深手の矢創十餘ヶ所
淺手の創は數知れず今は是迄とや思ひけんとある篋に馳せ
入て腹かき切てぞ亡せにける此隙に宮は虎口を逃れ高野山
へと落ち給ひしは村上父子がみよし野の花と散りにし其い
さをたつ田の秋のみち葉の紅き心に依るとかや赤さ心に
よるとかや

○石童丸

吉水經和氏作歌

筑紫の太守名も高き加藤左衛門重氏は無情を感じ世を捨て
諸國修行に出たまふ跡に残りし妻や子は思ひ待つこと十
餘年父上高野に在りと聞き石童丸は母上と昔の小笠を傾け
て旅のつかれもいとひなく漸く高野の禿宿明日は逢はんと
喜べど女人禁制の山なれば母を麓に残し置き是非なく石童
たゞひとり杖をたよりにたどくと心細道踏み分けて峯の
薬師や瀧不動掌を合せつゞ伏拜み寂しさ言はん方なくも其
夜は其處に假寝して笠の屏風に腕まくら諸行無常と告げ渡
る鐘の音いと身にしみて九百九十の寺々や峯谷々の阿彌
陀佛菩薩を念じ尋ぬれど父ぞと思ふ人もなし三日二夜はは
や過ぎぬ籠の母を案すれば後に引かるゝ心地して松吹く風

の音までも母の聲かと疑はれ、

ほろ／＼と鳴く山鳥の聲さけば

父かと思ふ母かと思ふ

と昔の人のよまれたる歌の心もおもはれて、歩むともなく歩みつゝ、无明の橋にさしかれば、左に花を右に珠數、光明、眞言となへつゝ、菫萱道心下り坂見上げ見下ろす顔と顔、石童丸の振袖と高僧の袖ともつれあひ離れ難なく見えにける、親子の因縁是非もなし、其時高僧の袖にとりすがり、あな御僧よ御山の、今道心を教へてたべと請ふさまの、見れば一人の幼兒が、腰にさしたる脇差と、見覺へのある顔に、さては不思議と思へとも、さあらぬ体にもてなして、石童丸に申すやう、尋ぬる人の名

を書きて、札場に建つれば逢ふ事もあらんと聞きて泣き沈む、石童丸を菫萱は、憐み給ひ手を取りて、おのが住家に連れ歸り、國は何處名は何と問はせ給へば、涙ぐみ、國は筑前松浦の加藤左衛門重氏が、わすれがたみの石童と、聞ひて菫萱胸迫り、せき來る涙とめあへず、石童それと覺りしか、若し父上にてましまさば、あかしてたべと前に寄り、後に廻り菫萱の顔覗き込み、懇ろに請はるゝさまの石童を、あらなつかしの我子よと、言はんとせしが、名乗りかね、其菫萱は、去年の秋、空しくなりぬとのたまへば、石童又も泣きしづみ、せめて墓場を教へてと、請はれて、菫萱是非もなく、墓場に連れ行き指さして、これこそ父の墓なりと、教へ給へば、石童は、力なく／＼ひざまづき、涙にぬれし袖

たもと絞りもあへず香をたき雪より白き掌を合せ南無阿彌
陀佛と伏拜む姿を見つる苺萱は胸も張り裂くばかりなり十
年にあまる修行にて生者必滅會者定離本來空の理を悟りな
がらも恩愛の情には脆きものなるか墓場に倒れし石童を抱
き起して徐ろに涙は佛の爲めならず一度下りて母上に此由
いふて回向せよと諭されければ石童は泣々山を下りつゝ母
に告んと来て見れば哀れなるかな母上は石童丸を待かねて
麓の野邊に枯残る草葉の露と消えたまふあゝ父上に生別れ
又母上に死わかれ天にも地にも便りなくあとに便りは姉一
人逢ふて此由語らむと歸りて見れば姉も亦此世を去りて影
もなしさてもつれなき浮世かな更けにし夜半に霜牙えて磯

山松は音もなく千鳥しげ鳴く松浦瀉浪に漂ふ捨小舟ひく人
もなき石童は高野に在りし其時に憐み給ひし御僧より外に
便りはなしと知り再び高野に苺萱の庵尋ねて御弟子にと請
はれて苺萱是非もなく共に連れたち國々を修行なしつゝ信
濃なる國に住所を定めさせ師弟と名乗るばかりにて親子地
藏と稱へよと遺言し給ふ哀れさよ信濃に名高き善光寺石童
寺の本尊に親子石藏の在すなり親子の縁はかくまでも切つ
ても切れぬものなりと今は昔の物語り南無や大悲の地藏尊
南無や大悲の地藏尊

○狂女

人間の世の形勢を心に留めて案ずるに一度は盛へ又一度は

衰へることもある。左あらば水も流れて又其氷上に歸らざるが如くなり。祇園精舎の鐘の聲、諸行無常をあらはして、飛花落葉は面たり、唯徒らに過る身は夢の中なる夢なれや。其古へは我れながら、美人の姿人にも勝れ、餘寵の華と飾られて、今を盛りの華かづら、かけまくも忝くも、我君の御身近くに召仕はれて、月見花見の御遊の供、錦の褥玉の翠簾、明け暮れ馴れし身なれども、人一盛花一時と移れば替る身の憂さを、其寵愛も枯々に、今憔悴と衰へて、唯何事も妹背の契り、淺衣の薄き縁しと成り果て、哀れ果敢なき我身かな、人生夫人の身となる事なかれ、五十年過るは夢の中、僅か百年が間の樂も苦も他人によると、白樂天が書きたる詩にも、今身の上知られたり、哀れ唯柴

の慮に人なふして、獨り涙に伏し沈む、歌々たる殘んの燈火、幽かにして壁に添ひ、瀟湘たる夜の雨の窓、打つ音までも恨をそふる。媒となる恨の數の重りて、唐土までの思ひ草、哀れ費きも賤きも、物思ふ身は異ならず、流水同じ水なれど、淵瀬と替るが如くなり、唯人間の因果を廻る小車の、我が惡業に引され來て、斯る淨身を、や焦すらん。

○錦の御旗

坂正臣氏作歌

天照す日の影うつる、眞名井の流末清き、瑞穗の國は昔より、忠勇仁義の人多し、元弘年中の頃か、とよ、後醍醐帝の三の皇子、大塔宮、ご聞へしは、天性智勇備はりて、父の御爲め、國のため、義兵

を舉て逆臣を征伐せんとの御企、早くも賊に漏しかば、四方の備へ嚴しくて、比叡の奥にも南都にも、身を置給ふ事難く、熊野をさして落給ふ、股肱の臣は誰々ぞ、赤松律師光林坊、木寺の相摸三河坊、片岡八郎武藏坊、平賀の三郎、矢田彦七、村上義光の九人にて、柿の衣に笈を負ひ、兜巾眉深に被りて、先達つくりて、山伏の熊野詣に装ひたり、龍樓鳳闕に人となり、輕軒香車を出まされぬ、雲上人の御歩行の長途いかにと御供の人々危うく思ひしに、社々の御祈り宿りく、の御勤め露程も怠り給はねば、勤修を積める山伏も、見浴むるもの更になし、由良の湊を見渡せば、沖こく船の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に啼く。千鳥紀の路の遠山渺々と、薄紫の藤代の松に掛れる磯の波。

和歌歌上の浦かけて、月に磨ける玉津島光をよそに伏拜み、長汀曲浦の旅の路心を碎く習ひなり、雨を含める孤村の樹夕を送る遠寺の鐘哀を催す黄昏に、切目の王子に着きたまひ、叢祠に袖を片しきて、潮家の榮を祈ります、斯て十津川の戸野兵衛、竹原八郎にたよりて、暫し居たまへど、こゝにも長く在かねて、高野の方へと落たまふ、茲に妹加瀬庄司にて、賊に一味の士の宮をさへて申すやう、此道通し申しなば、鎌倉よりぞ罪せられん、さはいへ宮に弓引くは、いかにも畏れ多ければ、錦の御旗賜はるか、さなくば一人の御供を止めて、證據にせんと、言ふ、股肱の臣を一人だに、いかでか残し給ふべきせん、方なくも御旗をば、彼に與へて、虎の口、僅に遁れたまひけり、斯るところに、村

上彦四郎義光は、草鞋の緒や切れにけん、遙に後れたりしかば、宮に追付申さんと足疾く過る折しもあれ、碓と庄司に行逢へり。家人の持てる旗見れば、正しく錦の御旗なり、不思議に思ひ尋ぬれば、事云々と答ふるに、村上之を聞もあへず、くわつと怒て打睨み、こは抑もいかに何事ぞか、たじけなくも畏くも、四海の主人に御坐す天子の御子、朝敵を追伐あらん其爲に、御門出ある道にして、汝等ことき下郎輩かゝる舉動すべきかと、持たる御旗を奪取り、大の男を搔攪み、四五丈ばかり投たるは、獅子の暴れしに異ならず、此怪力に恐れけん、妹加瀬庄司二言も、半句も無くて、すくみけり。義光は御旗を肩に懸け、程も無く宮に追付き、御前にひれ伏し、事の由を具に申上しかば、宮は御喜

び古の北宮勳が勇氣にも立勝れりと愛ましめ、其のみならず、義光は吉野の奥の戦ひに、宮に代りて打死し、御旗に打たる日月と、光争ふ忠臣と、義士と稱へて萬代の君に仕ふる人臣の鑑とこそは、仰がるれ、鑑とこそは、仰がるれ。

○迷悟もどき

世のなかを迷ふが故に三界は暗し、一心さとれば、十方世界は廣くして、地獄も餓鬼も我にあり、彌陀も浄土も他にあらす、佛ごは何をいは間の苔衣、唯其儘の姿にて、慈悲より外に宿心は無し、唯世の中に腹は立つとも言葉は残せ、言葉寡く淳直にして、濁る心を澄し持ち、何れの人にも情あれ、情は人の爲ならず、廻りく、て小車の後は、我身に報ひ來る、されば古人の言葉に

も。聖。人。は。人。を。誇。ら。ず。大。山。は。塵。を。撰。ば。ず。仁。者。に。敵。な。し。と。か。や。
 枝。高。き。と。て。風。に。は。脆。く。あ。だ。折。ぞ。す。る。惡。ま。る。人。に。は。猶。も。能
 く。し。な。へ。見。よ。後。に。は。深。き。友。と。な。る。身。の。善。惡。は。人。の。上。に。て。我
 身。を。磨。け。友。は。鏡。と。な。る。も。の。ぞ。が。し。我。が。善。き。に。人。の。惡。し。き。は
 無。き。も。の。よ。唯。何。事。も。惡。し。き。心。を。捨。て。見。よ。何。國。の。里。に。も。住。み
 よ。か。る。心。し。み。な。人。は。我。智。我。慢。我。力。我。心。を。拂。ひ。捨。て。よ。彌。陀。た
 の。む。心。は。西。へ。う。つ。せ。み。の。も。ぬ。け。果。た。る。身。こ。そ。安。け。れ。

○武士道

西村天因氏作歌

我が日の本は昔より武を以て國を建て、智仁勇の三徳を兼備
 したるを武士道とも日本魂とも申すぞがし、天津日嗣の御寶

に。三。種。の。神。器。お。は。し。ま。す。鏡。は。智。な。り。劍。は。勇。玉。は。仁。の。徳。に。し
 て。教。は。此。に。根。ざ。せ。り。と。親。房。卿。も。説。か。れ。たり。武。人。の。習。ひ。智。略
 に。富。み。勇。は。萬。夫。に。す。ぐ。れ。た。る。其。人。な。き。に。あ。ら。ね。ど。も。仁。な。き
 と。き。は。小。智。に。て。匹。夫。の。勇。に。異。な。ら。ず。さ。れ。ば。百。行。萬。事。の。本。唯
 是。れ。仁。の。徳。に。あ。り。軍。も。民。を。救。ふ。爲。め。智。勇。も。仁。よ。り。出。づ。る。な
 り。も。の。ふ。は。物。の。あ。は。れ。を。知。る。と。い。ひ。情。知。ら。ぬ。は。武。士。な。ら
 ず。と。語。り。傳。へ。し。こ。と。わ。ざ。も。此。國。體。に。因。る。と。か。や。此。に。我。が。邦
 武。士。道。の。鑑。と。仰。が。れ。給。へ。る。は。楠。正。成。朝。臣。に。て。智。仁。勇。を。兼。ね
 備。へ。敵。兵。に。ま。で。情。あ。り。金。剛。山。の。寄。手。塚。敵。の。菩提。を。吊。は。る。其
 子。正。行。朝。臣。庭。の。訓。を。承。け。つ。ぎ。て。南。朝。二。代。の。忠。臣。な。り。比。は。正
 平。二。年。霜。月。末。の。事。か。と。よ。敵。の。大。將。山。名。伊。豆。守。時。氏。細。川。陸。奥

守顯氏數千騎の大軍にて河内國へ發向す正行斯と聞て猶豫せず二千餘騎を引率して瓜生野に打て出づ兩軍鬪をどつとあけ一度にさつと懸合せ追ひつ追はれつ攻戰ふ味方の若武者和田新發智源秀小歌うたひて進み入り身の長七尺有餘の法師武者阿間了願も一丈ばかりの大槍を馬の平首に引そばめ前後左右を突て廻れば矢庭に三十六騎打取つ太刀の鏝音天に響き汗馬の足音地を動かす大手の大將伊豆守矢疵太刀疵七所負ひ敵に後を見せければ一騎も更に返し得ず馬は弱りぬ敵は追ふ渡邊川にせき落され流る兵五百餘人霜月末のことなれば秋の霜は肉を破り曉の氷膚に結び所詮生くべきやうもなく憐といふも愚なり情を知れる正行は瀕る敵

を救ひあげ小袖かへさせ身をぬくめ藥を與へて疵を療し四五日ばかりいたはりて物具着せて馬引かせ式代してぞ送りける敵も味方も正行が仁に感ぜぬ者ぞなき其後文祿慶長の朝鮮陣のありし時島津維新入道議弘同じく子息忠恒は凱旋の後高野に登り敵味方打死の軍兵皆佛道に入らしめんと供養の石碑を立てたるも補公父子をぞ學ばれたる是皆武士の鑑にて彼の外國の赤十字博愛の道は石の上古き世よりも傳はりて我が武士道にこもりたる御國の教ぞ有難き時はいま武を奮ふべき時なるぞ智は鏡勇は劍仁は玉なる武士道を守りて起てよ諸人よ御國の光輝かせ御國の譽を揚げよかい

○群鳥

まだ住み馴れぬ此里の人の心がむら鳥逢ふも逢はぬも憂き
 も辛きも告げや渡せば無き事故に餘所に名の立つ因果なり
 よしそれとても君様に逢ふて立つ名は是非もなし逢はて浮
 名の立つは諸事無益たゞ世の中に昨日見ても今日見ても音
 信聞いても見も厭ぬ者は春の芽に梅と櫻に鶯の聲夏は卯の
 花に山杜鵑空に一聲音信て暮ゆく秋の虫蟋蟀樹間の月に鹿
 の遠聲何と聞ひても面白や冬は板屋に霰降る音雁の聲四方
 の梢に積もる白雪尙ほそれよりもいつまでも見ても見厭か
 ぬものは二人の親の面影と自ら姿を寫す唐の鏡に戀しき人
 の面影は日に幾度見ても見もあかぬそれに就きては皆人は
 戀をしてこそ情きを知れ我身を捨てて人の身は知られたり

戀しやと我は偏に思へとも思はぬ君を思ふこそ磯の鮑の片
 思ひ我に心を置く君も聞けば餘所には打解けて我には嫌疎
 な振を示す嗚呼恨めしや篠田の森の葛の葉の恨に置ける露
 程も思ひはせて思はぬ君を思ふこそ是も因果の縁で候

○母の教

高崎正風伯作歌

やよ正行よ正行よまさなきことなしたまひぞ父が御身を歸
 せしは若木のつき穂に橘の實のなりいでん爲ならず吉野の
 山の春の月光りは見えぬ世なりとも錦の御旗ひるがへし橘
 紙の一族のあらむ限りは君のため斃れて止めとの御遺言あ
 だになさじと立歸り汝妾に告げながら其舌の根もかわかぬ

に早くも其事忘れしか、忍びがたきを忍びつゝ、忠と孝とを全
ふし、君の御心安んぜよ、親の御靈もなぐさめよ、まさなきこと
なしたまひそ。

○小督

頃しも秋の半の空、眺がちなる御袖の涙の露を拂はせ給ひ、宿
直に待ふ、彈正の大弼、仲國を召され、いかに仲國、小督の行衛を
知りたるか、内裏を逃れ出しより、嗟峨の邊りに、聊の知邊便り
である、と聞く、汝いかにもして、尋出で、此文傳へよとの仰なり、
仲國、畏まり、唯嗟峨の邊とばかりにて、主人の名をだに知らざ
れば、尋ねむ様はなけれども、小督の君は世に知られたる、琴の
上手に在すれば、今宵、最中の月影に、君の御上思し出で、調へ給

はぬことよもあらじ、兎にも角にも、尋ね出まらせて、寂慮を
安め奉らんと、心に思ひ定めつゝ、畏まりぬと聞え上げ、直に御
前をまかり立ち、寮の御馬に打乗りて、隈なき月に、鞭を揚げ、牡
鹿なく、此山里と詠じけん、嗟峨野の奥に分入れば、閃き渡る、白
露に、尾花が袖も打濕り、鳴かはしたる虫の音に、浮世の善悪も
思はれて、獨り心を痛めつゝ、家ある毎に立寄りて、問へど知る
もの更になし、如何はせんと駒を立て、唯茫然として居たりし
が、若し寶林寺にや、在すらん、龜山近く到りしに、しづがき遙に
聞えけり、峯の嵐か、松風か、尋ぬる君が、琴の音が、どめつゝ、行け
ば、一村の松の陰なる、片折戸、中に聞ゆるつま音を、手綱緩めて
熟々と聞けば、まことや、月花の御遊のむしろに、侍べりて、御笛

つかふまつりし時、聽覺えつる調にて、殊更曲は想夫戀さては
 紛れもあらじとて、腰よりやうてふ拔出し、少しばかり吹き鳴
 らし、頓て駒より飛下りて、門をほとく叩き、これは仲國内裏
 より御使に來りたり、開けさせ給へくと訪ふに、琴彈さし静
 りかへつて音もなし、やゝありて、いたいけしたる小女房、顔ば
 かり差出し、あやしの賤が伏家に、内裏より御使など、賜はるべ
 きにあらず、門違にや在すらん、仲國はなまじひに應しては、門
 さゝれんと思ひければ、是非なく押して内に入り、妻戸の縁に
 進みより、何とて斯る處に御在候ぞ、君には明暮思沈ませ給ひ、
 つやく供御も聞し召さず、御命さへほとく、御覺束なくこ
 そ見え給へり、斯く申さば、うはの空にや、御在らんと、御玉璋を

參らすれば、あら懐かしの雲井やと、御文顔にあてたまひ、暫し
 言葉もなみだの雨には、はれたる月も曇るらん、仲國もそゝるに、
 せき來る涙をおさへ、兎角慰めまらせつゝ、表の衣絞るばか
 りになり、にけり、稍ありて御かへり事引結び、女房の装束一重
 賜ひければ、肩に懸け、君にもさこそ待詫在すらん、重ねて御迎
 に參るべし、待たせ給へと言ひ捨て、駒を早めて立歸り、ありし
 次第を残りなく、奏する程にほのくと、秋の長夜も明けにけ
 り、秋の長夜もあけにけり。

○大和魂

田中頼庸氏作歌

ときくの花も紅葉も、數かぎりの多ければ、千種の匂ひいと

深く、人の心を動かせと、櫻にますはなかりけり、吉野の山の春
霞朝日に匂ふ花にこそ、大和魂なぞふなれ、此魂は日の本の、人
の身ながら持分て、頭にやとるものぞかし、國を守らひ、世を憂
ひ、直く正しき誠もて、君を敬ひ親を思ひ、人たる道にいさをし
く、心の柱ゆるぎなく、いよくかたくおし立て、我が大君に仕
へつゝ、治まれる日も亂れ世も貴き賤きにかゝはらず、國の爲
にとひとすちに勤むる人こそ賢くも、此魂持たるしるしなれ、
斯るしるしの著しく、仰ぎに仰ぐ臣たちは、菅原の神和氣の君、
楠の朝臣を初めに、昔も今も數しらず、たゆる間もなく産れ
出、花の匂ひ長なへに、あらはず人のあればこそ、動かぬ國の寶
なれ、譽は文に輝かし、幾千代か、かほり行らむ日の本の、大和魂

めでたいや。

○老蘇の森

數ならぬ身にさへ年は積るかな、老は人を嫌はざりけりと、連
ね置かれし言の葉が、今我が身の上に知られたり、されば此の
世に生れ来て、生老病死の四つの苦を遁るゝ人は、更になし、彼
の又四つの苦の中に、いづれ差別はなけれども、中にも老苦が
哀れなり、其古は我れも亦容顏美麗の姿にて、月か花かと人に
も見られ、假初の道行ぶりに、花を送られ、文玉章を取り替し、笠
のはづれの隙よりも、人を見初むる目元まで、あゝ耻づかしと
思ひしことも、夢かと覺めて、哀れなり、去年より今年、昨日より
今日と、おとろふる姿見るたびに、くやしき事の増鏡、涙にくも

る哀れさよ、さればこそ詩にも歌にも記さるゝ、白髪重ねて來
る一夢の中、昨日まで乗つて遊びし竹の駒、今日はや老の坂
ゆく枝と頼まん、又古歌にも、變り行く鏡の影を見るたびに、老
蘇の森の歎きをぞすると、連ね置かれし言の葉が、今身の上に、
知られたり、唯何事も人間の、此の世に在るはうたゝねの夢か、
うつゝの間なり。

○須磨寺

世の中は、戀修羅佛道、是れ皆浮世の習ひにて、茲に又無官大夫
敦盛は、須磨寺の笛の會こそ、面白や、左もあらば、早や磯邊を差
して下らせ給ふかは、や磯邊にもなりぬれば、武藏國の住人熊
谷次郎直實は、敦盛を目に懸けて返せ戻せと名乗り掛れば、痛

はしや敦盛は、御座船遙に押出す、駒引き返し給ふぞ哀れなり、
熊谷此君を一目見給ふより、我子小次郎に思ひ替へ、心變りとな
り給ふされど、櫓番衆の前なれば、遁すな、討て捨てとの御意
下る、力なくして涙と共に打ち取つて、猶も思ひの彌増る、熊谷
敦盛の首を取上げて、彼是御覽あれば、心も亂れ氣も絶へて、新
黒谷を指して落ち給ふは、や御寺にもなりぬれば、弓も刀も投
げ捨て、武士の道も打捨て、法然上人を頼ませ給ふ、心の中こそ
殊勝なれ、其名を蓮生法師と申すなり、三年が程は、終夜百萬遍
を唱へ給ふ、されと思ひは晴れずして、彼方の空を誦詠め、言問
ふものは磯邊の千鳥、鳴く聲ばかりにて、最と、思ひの彌増る、
沖を遙に見渡せば、上り下りに行逢ふ船は、數多なり、兵庫和田

御須磨明石あれが西寺の宮ヶ崎堺の濱を打録め音に聞へし
大阪の城の要害四方四面に峰高く四方の圍は夥し唯何事も
浮は世の中つらきは教盛義理は蓮生法師にて物の哀れをと
かめたり。

○甲斐殿道行

寝られぬまゝに思ひ立ち出づるぞ名残り三日月の回り逢ぬ
も定めなしと思へとも亦何の時にか君が面影を見る由もあ
りなんとまだ東雲に立出づる頃しも春の朝ほらけ垣根に訪
ふ鶯の鳴く音に花や散りぬらんとても花は春あらば又も昔
になりぬべし二八の秋の紅葉こそ惜しむに甲斐はなかりし
と思ひなぞらへ行く程に浮世をまはる車町緑の末もいと長

き柳の町をも行き過ぎて甲斐なき戀は諏訪の山前は稻荷の
後迫愛宕山をも妻手に見て我が身の上は生殺したとへ行く
こと物憂けれ命あらば又來ん春と行くほどに立ち寄る影も
なほ更に今はなき世に業平の名ばかり残る涼松よしや吉野
の花盛り君ゆる見るこそ果敢なけれ實にや宮捨人の花には
何と隠れ家の五月はまだき菖蒲谷東を遙に眺れば名にも似
ん鐘の聲なき山寺は戀する人の住家にて遠路の里に立煙り
これぞ春の霞かな木がくれに行く道なれば人目の關や忍び
つゝ心細くも通り山暫しとて人や立寄る柴の下これより先
きは下り坂逢坂などゝ名を云はゞ誰が踏み初めし首途ぞと
思ひなぞらへ行く程に名は白金の小石原眞砂の敷は盡くる

とも思ひは果てじ何時までも限りも知らぬ命ぞと彼の明神
を伏し拜み南無や明神願くは空吹く風のおとづれに聞き及
びにし與市様に露の命の消え果てぬ間に廻り逢はせたまへ
かしと深く祈誓を申しつゝ見下し見れば春霞棚引く雲の絶
間より遠山の櫻ほのかに見えし其歌に深山木の其梢とは知
らざりき櫻は花に顯はれにけりと詠みたりし歌の心にも相
合へる春の空と打ち跳め脇本の宿を過ぎ行けば絶へず流る
思川鶉鳴くなる餅田原行くに果てなき十日町左には南無
薬師流れの水も潔よし折ふし満潮なりければ竿さし渡す海
士小舟身を諸共に浮れ出で思ふ心の底深く實にや忍ぶにも
同じ心の人もなければ行衛も知らぬ有様を誰にか斯くと岩

の源何かは君を松原の苔の細徑踏み分けて思ふ加治木に着
きにけりはや珍宗寺の鐘の聲君が在家を告げぬらん人の別
れや急ぐらん君が在家は常磐にて今三洲の萩原と尋ね行き
たる門の邊に彷徨みて與市様々々と問ひけれど左しも思
ひし甲斐もなし折ふし他行なりしかば力なくして立歸らん
とは思へどもこれまで來りし印とて門の扉に書くばかり其
文に曰く聞きしに勝る黒金の遠きを忍びて此處まで往來す
といへども不縁第一にして逢ふことを得ず空しく歸る道す
がら君に於ては恨なし我が身の若きより空しく夕を送り又
何れの時をか期せんと書き置きて歸る道すがら又と云ひて
も身のあらばこそと打ち歎き與市様に投節をはねかけて謠

ひ歸りし有様は、見る目もいとあぢきなや、唯何事も心に、物思はせて、身を苦しむる我が身かな。

○威海衛

小田爲岩氏作歌

名も高き渤海灣の咽喉なる威海衛の戦は、聯合艦隊司令長官、伊東中將の手足の如く帥ひます、水雷艇の働きは、宇宙稀なる功勳を、聞くも中々勇まじや、敵の艦隊勇々しくも、威海衛の要害に、防材堅く敷設して、灣内深く潜みつつ、戦ふ様も見えざれば、我聯合艦隊は、朝の雨雪に身を浴し、夕の風に梳り、唯遠近を取巻いて、空しく時日を過せしが、我陸軍は日島と劉公島を除く外、所々の砲臺攻取たりと、信號の旗を見て、伊東司令長官

は、急に水雷艇隊の司令を召し、水雷攻撃を命すれば、藤田少佐今井大尉の兩司令、姿勢を正して申すやう、そは吾々が望む所されど、また僅か防材の切れめを目ざし、暗礁多き海なれば、誓て功は奏せんもの、水雷艇はことごとく、再び此處に歸るまじ、さらばとばかり立ち上り、誠忠面に表はれしを、司令長官も坐に感じ、落す涙も國の爲め、思ひきつて、ぞ別れける、夜もはや更て、月影は、威海衛の山に隠れ、黒白もわかぬ眞の闇、敵兵夢を結ぶころ、我水雷艇九艘は、第三隊を先鋒に、百尺崖の此方より、波を蹴てぞ進み入る、其勢は矢の如く、港灣内に突き入れば、斥候の敵艦之を知り、信號の光り閃くや、灣内俄に騒ぎ立ち、打出す速射の砲丸は、雨か霰と降る中を、我艦隊は物ともせず、忠義

に身をや捨小舟、縦横無盡に馳せ廻る。第九號艇は素早くも、巨艦間近に進み寄り、魚形水雷を發すれば、水烟一度にとつと擧げ、命中の音、天地も裂けんばかりにて、艦隊半は沈みけり。其明の夜も、此處や彼處に、水雷の音物凄し、斯く堅城鉄壁と頼みたる、旗艦定遠を初とし、來遠威遠も沈められ、戰鬥力も盡きぬれば、兵士ばかりは助けんと、頃は明治の二十八、二月十二日の朝、風に靡くや力なく、白旗立て、降伏の使節の船ぞ見え、にける。武士は物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の請を容れ、聊か心なくさめんと、贈物をぞ遣はさる。丁提督は、惻然として、吾が事已に終れりと、心靜に自害して、武人の道をぞ守りける。嗚呼、昨日までも今日までも、清國に争々たる北洋艦

隊の司令官、丁汝昌とも仰がれし身の、斯く成果つるは敵ながら、復も得難き英雄の末路の程こそ是非なけれ。茲に威海衛を占領し、砲聲全く鎮まれば、風雲たちまち一變し、威海の海に渦巻し、鎮遠號を初めとし、濟遠平遠廣丙號、其外砲艦數十艘、檣頭高く、雨を呼び、雲を起せし、黃龍もやまと、劍に角を斷ち、忽ち旗は日の丸の輝き、渡る海軍旗、君が御稜威は、天が下、仰がん者こそなかりけれ、仰がんものこそなかりけれ。

○赤星

初段

國を申せば、肥後國、在所記せば、隈府といへる、さて、在所に、赤星源次綱明殿として、弓取一人おはしますし、かも、其頃、肥前方に、

味方召されける其歳の年號申せば天正九年辛巳頃は卯月七日と申すに肥前がた龍造寺山城守隆信方より使者の参りて申すやういかに申さん赤星殿眞に肥前に味方せらるゝものなれば人質賜はれ赤星殿と御意下る赤星承はりさて中々國主の御意とは申せとも誰をか質に参らせん使者の言葉に齡は十四に成らせ給ふ松若殿として若のある由肥前屋形に隠れなし彼の若を質にくと御意下る赤星うけたまはりさてはなかく若は一人候へと彼の若質に出しては後の歎きは如何せんされとまた國主の御意には叶ふまじと若を召寄せ御尋あれば若の言葉に某國にありながら二人の親への御奉公國の爲となるならば今日唐土迄も参るべし質に渡らんこと

は御心やすくめされとて頓て十八人の士を御供に召連れたまひ肥前に御渡りなされ佐賀の御内に伺候あるこそ哀れなれいまだ三日も過ぎざるに重ねて使者の参りて申す様いかに申さん赤星殿齡は八ツに成らせ給ふ安千代殿として姫のある由肥前屋形にかくれなし彼の姫質に渡し給はれさもあらば兄の松若は國へ歸すとの御掟なり赤星承り扱はなかく姫も一人候へと若を質に出してさへ悲しきに幼少の姫迄も質に出しては母が歎きは如何にせんされとまた國主の御意には叶ふまじと姫を召寄せ御尋ねあれば姫の言葉にみづから二人の親の御奉公兄の代り國の爲となるならば京鎌倉迄も登るべし況んや肥後と肥前とは近き間と承る質に渡らん

ことは、御心やすく思召されとて、頓て士二人女中六人を御供
 に召連れたまひ、肥前に御渡りなされ、佐賀の御内に兄妹とも
 に伺候あるこそ、何より物の哀れなれ、是は扱置きこゝに又、肥
 前に於てつれなき士隈部左馬介親興と申せしは、赤星殿と界
 の論を召されしが、赤星殿より三百餘町を踏取られ、豫て此事
 を意恨に思はれて、如何にもして赤星に、腹を切らせんと思ふ
 折節の事なれば、之ぞ好き折と心得て、直ぐに隆信殿へ作り文
 を上げにけり、隆信此文を御覽なされ、以ての外に腹を立て、扱
 はなかく、赤星は、兄味の、子供を質に取られ、無念さに薩摩に
 妹方し、肥前に二張の弓を引くとかや、其儀ならば彼の兄妹は、
 此處へ置きて、如何せん、又國へ歸しても如何せん、肥前に於

て法ある法度の仕置、生張付けよと御意下る、痛はしや兄妹は、
 肥前屋形に三日も置かずして、肥後と肥前筑後の境南の關竹
 の世原に送りあるこそ、哀れなれ、松若言葉に、いかに申さん、隆
 信様某兄妹を御殺しあるならば、肥前屋形に於て、唯一太刀に
 殺し給へ、さあらばとて、士が、塀垣越えて、隠れ忍びは致すまじ、
 夫れ、武士は、疊の上に育ち、野原に死すを、本意とは申せども、某
 兄妹は、夢にも知らぬ、野原にて、長く、浮名の立つと思へば、あ
 是が、一つの如何なり、斯くは言ひつゝ、某は、男の身にて、苦しか
 らず、幼少の安千代は、國へ御歸し給はれと、日には七度の詔を
 爲す、姫の言葉に、如何に申さん、隆信様、自は、女の身にて、苦しか
 らず、兄の松若は、赤星が家の世つぎの事なれば、國に御歸し給

はれと日には三度の詔を爲す隆信御掟にいかにも兄妹科なき
 隆信を恨み給ふな謀反心の父の赤星を恨めとのたまへば姫
 のことばに如何に科なき隆信様を恨み申さん況してや父の
 赤星をも恨み申さん恨のあるは申より作り文を上げにし隈
 部殿こそ今生後生の恨みなり松若言葉にいかに安千代何某
 の子孫と言ひて女にこそは生れけれ人を恨みては如何にせ
 ん死出の山三途の大川左京が橋迄も諸共にと悦び給ふぞ哀
 れなるされば松若其日の装束は何時に勝れて花やかに先づ
 肌よりは白地練絹紫染に金糸の小袴確かと召され頼て十八
 人の士を御側に召されいかに方々鳴りを鎮めて聞き給へ某
 兄妹は身に覺なき科に上意をのたまふなりとても上意は逃

るまじ御身達は千に一つも隆信様より暇賜はるものならば
 隈府の在所に落行きて二人の親の御前に参りみづから兄妹
 斯く成り果てたる有様を一事も洩さず皆申上げよと曰へば
 六人の女中は皆頭を地に着け涙を流し誰とて御返事申す者
 もなしやがて松若殿は檢使を御側に召され如何にはたの板
 は西へ向けよと申せども某兄妹は肥後の方へ向けて給はれ
 然もあらば隈府の在所に二人の親の在ると思へばあゝ吹き
 来る風まで讓しや檢使如何にとありければ痛はしや兄妹も
 運や盡きるらん其日の檢使は隈部殿にてありければいかに
 兄妹はたの板は往古より傳はれる儀式なれば東へ向けては
 天道に恐れあり御身たち兄妹とても西へくとありければ

痛はしや兄妹は、最早力に及ばずと、隈府の方を三度招きては、
 たの板へぞ召されける。三日が間、小歌拍子にて、夜をも晝をも
 暮らし給ふ。痛はしや姫さみ、未だ幼少の事なれば、四日に當る
 扱も、酒の上刻、竹の世原の朝の露とぞ消へ給ふ。松若言葉に、如
 何に安千代、此世にあるか、無きかと問ひ給へば、答ふるものは、
 竹の世原の松風に、空飛ぶ鳥の羽音ばかりにて、愈哀れは増さ
 りける。松若どのも次第く、に衰へて、七日に當る扱も、午の上
 刻、竹の世原の朝の露とぞ消え給ふ。御側十八人の士は、此由一
 目見て、最早力に及ばず、皆一同に、肥前屋形に、亂れ入らんと思
 へども、多勢に、無勢力に及ばずと、皆はた下へ打寄つて、腹十文
 字に、掻き切て、朝の露とぞ消えにける。隆信殿、此由聞し召し、直

ぐに六人の女中を、御前に召され、いかに方々、御身達は暇取ら
 する。何國の里にも、落行けとのたまへば、女中勝の前、御返事申
 す様、あゝ情けなき、隆信様の仰せかな、われ二十の時より、御乳
 を上げにし、姫君さへも、御助けなく、數ならぬ我々どもへ、御暇
 賜はればとて、國へ落行き如何にせん、兎にも角にも、姫諸共
 と、言ふより早く、皆思ひく、に、清く自害を致さるゝ、未だ惜し
 かる。齡の勝の前が二十八、侍従の前が二十六、壽の前が二十五、
 小侍従二十三、少將十八、小櫻が十六、何れも劣らぬ花盛り、夜半
 の嵐に誘はれて、散りて行くこそ、哀れなれ、やがて此由、隈府の
 御所に洩れ聞え、さてはなかく、是は又夢か、現か、幻か、夢なら
 覺めてもゆけ、現ならば消えてもゆけ、幻ならば暫が程は、松の

葉色にも留まれかした天に仰ぎ地に俯して歎かせたまふぞ
 哀れなり隈府の御所は寺々の鐘の響もごままりて長夜の響
 と鳴きくらす是はさて置き爰に又肥前に於てつれなき士隈
 部副島鍋島田尻の人々は此ついでに赤星が領分を知行にせ
 んと皆思ひくくに我手ばかりを引具して隈府の城を十重二
 十重に取圍み濶の聲をどつと揚げければ赤星殿は此由一目
 見てさてはなか／＼兄妹の子供を無残に殺され歎かせたま
 ふ折ふし敵に攻められて太刀も揚らぬ次第なりされとまた
 斯ては叶ふべからずと猛く心を取り直し城門へ火をかけて
 天も霞めと焼き捨る住みなれし隈府の城を袖しら雪とふり
 捨て八代さして落ちて行く後よりは敵は群りしげく慕ふ

て追かくるこゝに赤星の郎黨村上兵部左衛門綱高とて大剛
 の勇士なりしが此よし見るより斯ては叶ふべからず某一人
 跡に踏止まり防ぎ矢射て人々を落し申さんと後陣遙かに引
 下り頼て大音揚げて名乗る様茲に扣へしは赤星の郎黨に村
 上兵部左衛門綱高とて名を得たる強弓の精兵矢つき早の手
 きゝなり汝等能く見よ斯る矢先に敵は嫌ふまじと五人張に
 十五束差取り引つめ射る程に生死は知らねど三十六騎は射
 て落す最早矢種も盡きぬれば持たる弓をがらりと投捨て三
 尺六寸の大太刀を抜持て群る大勢が中へ割て入り當るを幸
 ひこゝを専途と世にも激しく火花を散らして攻め戦ひしが
 向ふ敵七八騎は討取り其身も數ヶ所の創を蒙りとても叶は

ぬ事なれば、駒より飛下り、小高き所へ馳せ上り、腹十文字に播切つて、朝の露とぞ消えにける。未だ惜しかる齡は三十一、惜まぬ人こそなかりけれ、やうく此隙に、赤星殿は虎口を遁れ、八代さして落給ひ、八代の慈眼寺、正福寺、彼の二つ寺を深く頼ませ給ひ、終夜百萬遍を唱へ、兄妹の追善を營み給ひて、三とせが程は、日月送りでおはします。

二段

さるほどに、斯て三歳も過ぎ行けば、徳の口より夜船に召され、薩摩を頼みに渡らせ給ふ、順風よければ帆を揚げて程もなく、出水の津に着せ給ふ、其頃米の津は、島津義虎公の御持なれば、直ぐに案内乞ふて、義虎公の御前に参り、いかに申さん義虎

殿某は肥後に於て、赤星源次綱明と申す者なり、三歳以前肥前に於て、つれなき士隈部左馬介親興と申せし者の讒言に依り、二人の子供を無残に殺され、其上敵に攻められ、未だ太刀も揚らぬ次第なり、何卒肥前方に、一渡弓を引いて給はれ、義虎殿と、涙を流して頼みければ、義虎公聞し召し、さてはなか、世にも無残なる次第を聞くものかな、其儀ならば是より北に當りて、大口と云へる在所に、新納武藏守とて、弓取一人おはします、彼を深く御頼みあれと、案内一人付け給ふ、赤星殿は力に及ばずと、涙と共に義虎公の御前を下りける、夫婦打連れ、面は月日に曝され、裾は露袖は涙に打しめり、伊勢編笠で顔隠し、世は逆まに竹の杖つくくと、兄妹の子供の事が彌増る、名所舊跡尋ぬ

れば音に名高き盤若寺越を軽く召され急がせ給へば此處は
 はや菱刈表大口になりぬれば直ぐに案内を乞ふて武藏殿に
 御對面なされ彼の事頼み給へば武藏殿うけたまはりさては
 なかく世にも無殘なる次第を聞くものかな其儀ならば是
 より東に當り日州佐土原といへる在所に島津中務家久とて
 軍奉行のおはします彼れを深く御頼みあれ然もあらば此數
 ならぬ武藏にも一番に參り島原にて功名致さんとさも潔く
 返答し案内二人附けたまふ赤星殿は又も力に及ばずと直ぐ
 に大口を御立なされ名所くを尋ぬれば音に名高き高鼻越
 を軽く召され眞幸五ヶ所をかけ通り白鳥山を伏し拜み野尻
 紙屋を馳せ通り急がせ給へば程もなく日州佐土原にぞ着せ

給ふ直ぐに案内を乞ふて中務殿御前に參りいかに申さん中
 務公某は肥後に於て赤星源次綱明と申す者なり三年以前肥
 前に於てつれなき土隈部左馬介親興と申せし者の讒言に依
 り兄妹の子供を無殘に殺され其上敵に攻められ未だ太刀も
 揚らぬ次第なりやうく此處まで參り候なり何卒肥前方に
 一渡弓を引て給はれさもあらば代々の御恩いかで報せざる
 へきと頭を地に着け涙を流して頼み給へば中務公さこしめ
 しさてはなかく以ての外なる仰かな當國は矢崎合戦以來
 赤星殿は大敵肥前の隆信殿は清和源氏の末なれば弓矢に取
 りては味方なり其儀無用と仰せける赤星殿は心も亂れ氣も
 絶えて最早力に及ばずと涙と共に中務公の御前を下りける

是は扱て置き茲に又中務公の御嫡子又七殿と申せしは、今年十三歳にならせ給ふが、赤星の斯くの次第を、あはれと思し召し、直に中務公の御前に跪き、如何に申さん、父上様國主が國主に、加勢を頼むは世にあるなら、ひとひ大敵にもせよ、人窮すれば、本に歸る鳥窮すれば、懷に入るとかや、夫れ武士は、昨日の敵も今日の味方となり、今日ある味方も明日は仇、何卒肥前方に、一たび弓を引て給はれ、然もあらば、此數ならぬ某にも、二つの歳を頂き、十五歳と罷成り、御馬の前にて、功名致さんと、勇み進んでのたまへば、中務公聞し召され、又七殿の義氣に感じ、其儀ならば早く赤星を呼び返へせとのたまへば、又七殿は大ひに悦び、直に御前を罷立ち、赤星を呼返したまふ、赤星殿は斜な

らず悦び、又も中務公の御前に参りける、中務公の御掟に、いかに申さん、赤星殿當國とても、島津義久公の領地なれば、議定返事は致されぬ、兎にも角にも、義久公に御意を伺ひ、弓を引かでは叶ふまじとありければ、赤星殿悦びたまふこと限りなし、それより中務公は、佐土原小路に、島原攻と觸させ給へば、我もくと進む士、中務殿御手に七百騎、又七殿御手に三百騎都合、一千餘騎にては、や佐土原を御立なされ、急がし給へば、世は何事も、勝目の坂を打越へては、や高岡を馳せ通り、老川になりぬれば、死出三途の川と打渡り、最早庄内三俣や、日は高城を打過ぎて、都の城に、一夜の宿陣召されける、直ぐに其夜は北郷一雲殿に御内談召されしが、一雲心得たりと言ふまゝに、直ぐに

都の城中へ、島原攻と觸れければ、未だ時刻も移さぬ其暇に、我もくと馳集まり、先づ一番に小杉士持北郷民部佐衛門を始めとし、都合其勢一千餘騎にて、はや都の城を、まだ夜深くも御立ちなされ、最早三重町を過れば、元服の渡を軽く召され、平羽瀬過れば、夜は深更の峰を打越え、糸原をも打通り、心やすくも通り山駒は立たねとまきの原急がせ給へば、福山の宮が浦にぞ着かせ給ふ、夫れより中務公は、浦々の兵船二十餘艘を御催し、宮が浦より夜船に召され、先づ一番に、弓手に見えしは櫻島妻手に見えしは源氏の氏神、正八幡を伏し拜み、加治木の里を眺むれば、音に名高き蛇王嶽嵐に花の敷散りて、流れて出る黒川や、こゝは帖佐の小松原、君におほ崎龍が氷三船の明神伏し

拜み、暫しは此處に浮かり船浦吹く風に帆を揚げて、順風よければ早鹿兒島の春日の町にぞ着せ給ふ、直ぐに五社御參詣思ひく、祈願の程は限りなし、中務公は御屋形に參り、義久公に御對顔なされ、赤星が次第を申上げければ、義久公聞し召し、其儀ならば弓引かでは叶ふまじ、軍は勢の多少に依らず、時の大將の運によるべし、此渡の大將は、中務父子と御意下る、暫し御内談召されしが、中務公は直ちに、鹿兒島の小路く、肥前島原攻と觸を回させ給へば、我もくと進む士、先づ一番に御一門に取ては、島津中務御父子、御洞苗圖書頭忠長、島津主衛門の尉種子島大膳の太夫、北郷一雲、其外士大將に取つては、先づ一番に新納武藏守忠元、上原長門守川上三河守、喜入攝津守忠

政樺山權左衛門尉久高、入來院又六重時、阿多長壽院盛淳山田
 正巖、押川強兵衛鎌田寛政、伊集院久治、宮里野村弟子丸梅北の
 某、伊勢彌九郎貞政、中にも川田駿河守川上左京久堅、稻留左京
 猿渡右京、出水方に取ては先づ一番に、島津議虎公を初めとし、
 御同苗伯耆守町田出羽守平田和洲、村田猪之介等を先として、
 御一門外に士大將二十餘人、總勢一萬三千餘騎にて、はや鹿兒
 島を御立なされ、鶴丸山を後に見て、音に名高き氷上坂を軽く
 召され、腰は掛けねと横井町間遙の五本松、君の心は清淵涼み
 松、伊集院六郎坂を軽く召され、弓は無けれど、矢立原、城は無け
 れと城の町、急がせ給へば程もなく、市來の港に、一夜の宿陣召
 されける、大隅薩摩は遠國なれば、肥前に合する旗二十四本と

ぞ聞えける、夜も明けしかば、市來の港を御立なされ、佛の前で
 はあらねども、佛生橋をも打渡り、二度と歸らぬ薩摩山、死出の
 山ぞと打越えて、敵に向田川内川を、三途の大川と打渡り、直に
 新田八幡へ、御參詣なされ、中務公御祈願に、南無や八幡大菩薩
 此度貪慾非道の隆信を、何卒打たせ給へかしと、深く御祈願召
 されつゝ、やがて川内を御立なされ、西方阿久根をかけ通り、高
 城の小路を打過ぎて、急がせ給へば程もなく、出水米の津に着
 かせ給ふ、義虎公の旗揃へ、米の津にて三日がほと、軍評定とり
 くなり、茲に川上三河守上原長門守、彼の人々は薩摩に於て、
 かねて物に慣れたる、編強の兵なれば、天草島へ打渡り、天草殿
 へ此由斯くと告げければ、天草殿は心得たりと言ふ儘に、直ち

に足輕雜兵五百餘騎をすぐり出し、薩摩方へ加勢として渡さる。頃て此よし、中務公へ申上ぐれば、中務公斜ならず御悦び、直に御馬は徳の口へ廻さる。夫れより浦々の兵船三百餘艘を御催し、矢筈が嶽より吹おろす嵐と共に船を押し出す。名所瀧跡浦々眺めて、面白や先づ一番に夕生きて、今朝はや顯れ出しものは、藏島瀨崎笠山、三日月山を後に見て、時に渡せば、今浦本浦唐木崎、笛と太鼓はなけれども、神樂崎をも打過ぎて、敵の爲にはし、の島味方の爲には命長島、今日の日もはや、吳羽鳥、一夜の宿をば、輕う島敵に向へば、荒江崎、夜はほのく、とあこや島朝日に向ふ日の島や、寝亂れ髪のかつら、崎君はなけれど、御所の浦、鷺鷥は住まれと池の浦、名殘惜しさの姫の浦、風に柳の

瀬戸打過ぎて、五月なかばの、夢の浦、三角の瀬戸を打過ぎて、今朝の嵐にはや、島原の高濱へぞ着かせ給ふ、直ちに島原の安徳寺に、御陣めされしが、夫れより中務公は、軍の手わけ召されける。先づ一番に、稻留左京、猿渡右京、五百餘騎にて、島原口のかためなり、島津主衛門の尉を初め、新納武藏守種子島大膳太夫、彼の方々は三千五百餘騎にて、野首の陣に籠り給ふ。島津義虎公を初めとし、島津伯耆守町田出羽守、彼の方々二千餘騎にて、浦手口のかためなり、伊勢彌九郎、貞正、川田駿河守、川上左京、久堅、彼の人々は一千五百餘騎にて、桑原の陣にぞ籠りける。島津中務公、御父子、川上三河守、上原長門守、彼の方々は、残りの勢を引、具して、總陣へ籠りたまふ。足輕雜兵五百餘騎を勝り出し、これ

は御先陣の御手當なり、やがて此よし、肥前方へ使者を遣はさ
 る、使者は案内乞ふて内へ入り、やがて隆信殿へ、此の由斯くと
 告げたれば、隆信殿からく、と打突ひ、愚人夏の虫、飛んで火に
 入る風情かな、音に聞く、島津兄弟を、此たび我が手を以て、やす
 く、と討滅ぼし、三箇國を我が手に入れ、我九州九ヶ國の主と
 なりて、子孫永く榮華に榮えんと、勇み進んで勢捕へ、六箇國へ、
 島原よせを觸れさせ給へば、我もく、と進む兵先づ一番に鍋
 島加賀守直重、田尻副島隈部左馬介親興、刑部和田民部伊奈常
 陸守同苗縫之助、野中大膳吉弘、嘉兵衛尉宗晴、野口能登守圓城
 寺美濃守成松遠江守寺山陸奥守一族には小川武藏守小宮源
 左衛門、後藤家持、龍造寺家種、此の人々を初めとして、士大將九

十餘人、總勢六萬八千餘騎にて、龍造寺隆信を總大將として、九
 十三本の旗を靡かせて、吉日ゑらばれ、肥前の城下を御立なさ
 れ、島原へところろぞす、此人々の勢のほどは、いかなる勇士も
 面をそばめなかく、恐れぬ者こそなかりけれ。

三段

さるほどに、薩摩方は思ひく、陣所を構へ、肥前方より寄せ
 来る敵を、今や遅しと待ち給ふ、やがて肥前軍衆は、島原に渡り
 て、薩摩方を一目見て、さてはなかく、此度の合戦は、案に違は
 ぬ、小勢かな、いざ高珠數にはあらねども、手の内にて、揉まも
 のをとて、勢荒鷲の小鳥を狙ふて、勇むが如くなり、薩摩方に於
 ては、島津中務公之を、御覽なされ、いかに方々あれを見よ、此度

の合戦を譬へなば籠の内の鳥網代に籠る魚とかや前には大
 敷後には大海左右には巖石に圍まれて洩れて行くやうは更
 になしされと又中務公は智惠第一の名將なれば二心つかは
 ん其爲めに三百餘艘の兵船を皆島原の高濱に引揚げ悉く焼
 き捨てるやがて陣屋くに觸れを廻はし此度の合戦は生き
 て薩摩に歸らず死して島原の土となれ向ふ先きは面も振ら
 ず切つて通れと諸軍勢に下知をなし明くれば水無月十八日
 と申すまだ東雲ばかりに肥前方總陣一度に鯨波の聲をとつ
 と揚げ大將隈部左馬之介親興と名乗り二千餘騎にて大手の
 口に押寄する薩摩方先手の大將稻留左京猿渡右京五百餘騎
 を引ひて肥前方大勢の中にまつしくらに切つて入り追ひつ

追はれつ受けつ流しつ三度の太刀打四度の追込五度の戦ひ
 六度の合戦七八度日には鎧を削り鎧を割り切羽の金も微塵
 になれと世にも激しく此處を先途と戦ひしが隈部左馬之介
 を初め向ふ敵一千餘騎は打ち取りたりされとまた稻留左京
 猿渡右京其外百餘騎はつまりく討死す未だ惜かる歳は
 稻留は二十六猿渡は三十一と聞えける茲に又川田駿河守は
 豫て聞えし兵道者なれば清氷谷に下り夜の間七渡の水を
 かかり天に向ひて秘法を行ひたまへば源氏の氏神正八幡殿
 訪稻荷祇園春日の五社の神より此度の合戦は肥前は亡び薩
 摩は勝軍に疑なしと御託宣ありしかば中務公此由を聞し召
 され御悦び斜ならず最早此由陣屋くに觸れさせ給へばこ

れを勢ひに島津主衛門尉輝久殿は一千餘騎を率ひて野首の陣より一つ貝を合圖として切つて出づれば肥前方小川武藏守が大勢におろし合せ此處を先途と戦ひしが向ふ敵一千餘騎を討取り陣所を指して引ひて行く其勢ひに加治木彈正は三千餘騎にて大手の口より切つて出づれば肥前方寺山陸奥守が勢におろし合せ大勢の中へ割つて入り群がる敵を弓手妻手に打ち据へ當るを幸ひ其處引くなといふまゝに此處を先途と戦へば又も向へる敵二千五百餘騎を討取り陣屋を指して引ひて行く茲に又平田和洲村田猪之介二千五百餘騎を引ひて島原口より打つて出で肥前方細口の大勢におろし合せ面も振らず火花を散らして戦ひけるが又も向へる敵一千

餘騎を討取り陣所を指して急ぎ行く是は扱て置き茲に又島津中務公は軍は今が時分と心得て嫡子又七殿を御側に召されいかに又七唐士の虎は一日に千里を馳せて駈け戻り一身を捨て毛を惜む夫れ日本の武士は幼きときより武藝を盡し名を末代に残し置く人は一代名は末代必ず跡に残りて未練いたすな名字の耻辱家の耻といふより早く東の北山の手口に馳せ回り肥前方大勢の中に横合より打つてかゝりやがて大音揚げていかにかゝる某を如何なるものと思ふらん薩摩に於て島津中務とは某なり手並のほどを手本にせよやといふより早く二尺八寸の太刀を抜き持ちて大勢の中に割つて入り真向立割車切當るを幸ひ其處動くなといふまゝに追

ひつまくりつ受けつ流しつ西より東蜘蛛手搔く打十文字八つ葉形をいふまゝに縦横無盡に切り立つれば四方にさつと小路をあけ又もや向ふ敵三千五百餘騎を討取て陣所を指して引き退きぬ是は扱て置き茲に又川上左京久堅は軍は今が華と心得て我が手勢三百餘騎を率ひ栗原の陣に控えけるが、切かに寺山が死したる旗を奪ひ取り肥前軍衆に様を替へ敵陣の中を彼方此方と回りけるが鍋島に行き逢ひいかに鍋島殿某は士の未練ながら唯今中務殿の横入に目がくれて我が君隆信公の御旗本をはたと忘れ候ひしが教へたまへと涙と共に申しければ鍋島の運や盡きけん此人々を味方の者と心得て床几に腰を掛け母衣掛武者にておはします急ぎ参られ

よと教へける左京斜ならず悦び鍋島が教えの通り本陣に馳せ登りもはや手の中と心得て其日の装束を改めいかに申さん隆信殿某を如何なるものと思ふらん薩摩に於て島津義久の耶黨川上左京久堅とは某なり此の度赤星が兄妹の子供の恨みの太刀を受けて見給へと大音揚げて申しける隆信殿は大ひに驚きさてはなけく川上は薩摩に於て家ある武士か家なき武士か若し家なき武士なれば日下に回れとありければ川上殿はからくと打笑ひさてはなかく思ひも寄らぬ仰かな士が士を討つに日下日表の差別なしといふまゝに三尺八寸の大太刀を抜き持ちて隆信の弓手の袈裟掛水もたまらず打ち落す御側の士三十六騎はやくも此由見るより

も主を討たせては叶ふまじと切つて掛れば川上殿は隆信を討ちたる勢に世にも激しく此處を先途と戦へば痛ましや三十六騎も一つ枕に唯やみくと討たれたり隆信殿の歳を申せば五十一やがて隆信の首を太刀の切尖に貫きて小松原の本陣を心靜かに引ひて行くやがて小松原にもなりぬれば鍋島加賀守副島右衛門の二大將此の由を一目見るよりさてはなかくあれを見よ薩摩軍衆が何時の間に奥の陣にもれたかな主は討たる手勢は持たず我が君の敵何處までも落ち行くぞ遁すまじといふより早く切つて掛れば川上殿心得たりといふまじに向ふたる先きは唯一筋に切つて通れと士卒に下知をなし寄せ来る敵は群りて追ひつ流しつ受けつまく

りつこを先途と戦へば向ふ敵數多討取り仕すましたりとて味方の陣に引ひて行くやがて隆信の首を寶檢に供へければ中務公心得たりと小高き所に馳せ上り大音揚げて肥前の大將龍造寺山城守隆信を川上左京久堅が討取りたりと呼ははりて勝鬨を三たびとつと揚げたまへば薩摩軍衆はこれを襲ひ三箇國の勢は一手になりて肥前方の落ち行く勢に掛け合せ弓鉄砲を放ちかけおめき叫んで戦へばいたはしや肥前軍衆は秋の田の水にはあらねどもつまりくに切つて落さるものには數しれず斯る所に島津又七殿は鍋島が落ち行く所を見たまひて駒をはやめて如何に申さん鍋島殿何處まで落ち給ふぞ斯く申す某は薩摩に於て島津家久が嫡子島津又

七とは某なり、今年歳は十三歳、軍は今日が始めなり、此の度の合戦に討死いたすものなり、我れを討取つて高名せよ、と呼びければ、鍋島も落ち行く駒の手綱を引返し、大將は討たれ、手勢はなく、何の力で軍せんと、馬より飛び下り、兜を抜いて降参するこそ哀れなれ、又七殿思召すやう、降参したる士を切つて捨てんは如何ならんと、如何に鍋島殿、島津の家を如何なるものと思ふらん、忝くも清和天皇の御末なれば、島津方に二たび弓を引くこと無益なり、此度の合戦は、赤星が敵軍のことなれば、國取るまでは及ぶまじ、肥前の城は御邊に預け置くとぞ仰せける、鍋島大ひに喜び、三たび禮して御前を下り、肥前を指してぞ急がる、其後中務殿は、討死ある首級を召されける、肥前

方には、龍造寺山城守隆信を始めとし、士大將百三十五人、其外總勢一萬千七百餘騎とぞ聞えける、薩摩方には、稻留猿渡を始めとし、上下ともに八百餘人とぞ聞えける、さても討取たりし隆信の首を、寶驗に供へければ、やがて隆信の首を、太刀の先きに貫き、小高き所に差し揚げて、島津屋形を、軍神摩利支天尊と伏し拜み、誠に島津方は、今生後生忘れ難しと、喜び給ふこと限りなし、茲に又八代御前は、此の首を見て、兄妹の子供の事がいや増さるとて、烏丸にて蹴上げ蹴下し、七たびが間氣色をなして、八度目に納め置く、川上殿は、此事見るより、大ひに腹を立て、士が太刀の先きにて、取りたる首を、女の手足に掛けては、如何せんともありければ、又七殿進み出で申されけるは、いかに申さん

川上殿（古より）女童（さか）と言ひ傳へ（の）あるが誠なりとのたまへば、
川上殿もやうく、心を取り直しける。其年の年號を申せば、天
正十二年甲申、頃は彌生の十四日なり。其日の干支は辛卯、源
氏の（氏）神正八幡の御縁日。世の中は何と聞ひても唱へても、浮
きは世の中、つらさは隆信、義理は薩摩方、物の哀れを留めしは、
赤星が（兄）妹の子供にて、諸事の哀れを留めたり。

○梅が枝

春はまづ咲く梅が枝に、谷の戸出る鶯の聲も聞えて高瀬掉す。
佐保の河原にくりかけていと珍らしき岩躑躅言はぬ思ひの
色錦井出の山吹藤咲きて、松にも花を春日野の緑榮えある若
草に、荒れたる駒も夏來ては、御法の門に、兼て後生を願はざる。

人の心の卯の花や、橘匂ふ五月雨に、山郭公音信れて、いと昔
を戀ひ衣重ねて袖を濡すらん。蘭奢の花の時錦帳の下、盧山の
雨の夜草庵の中と賦しをける。詩の心にも同じ思ひの管筵敷
き忍びたる淋しさを、誰とも知らで秋萩を植えて淋しき庭の
萩すゝきも月も穗に出て、亂れ亂るゝ仇野の草葉に置ける露
の身の消えぬ便りを、松蟲の聲さへ今は霜枯れて、雪白妙にふ
る里を、哀れと思ふ人もなし。恨めしの浮世かな、あゝうらめし
の此の世かな、諸行無常の春の花は、是生滅法の風に誘はれ、生
滅滅已の秋の月は、寂滅爲樂の雲にかくれ、僅かも此の世に溜
まらず、しかしまた、浮身を捨て果んとは思へとも、流石また戀
しき人の面影は、切るに切られぬ煩惱の、長き絆に結ばるゝ身

こそはかなけれ、彌陀頼む人は雨夜の星なれや、雲晴れねとも
西へ行く極樂を、十萬億土と云ふなれと、また越しなんと聞く
ときは、茲を去ること遠からず、唯有明の月の御船は、妙法の風
に任する身こそ安けれ。

○王政復古

物集 高見氏作歌

王政復古の當時を思へば過ぎし慶應の三年の冬の十二月九
日の日を初めにて都の空に立歸る春の光もかきくらす雪消
の雲のたちまちに世は刈蒺と亂れつゝ山郭公鳴く頃五月
間にはあらねども黑白もわかぬ墨染の鞍馬の山の山彦に響
き動めく大砲の音はさながら百雷の一時に落る心地して驚

き騒ぎ泣叫び老若男女逃げ迷ふ都のうちはさながらに鼎の
沸くに異ならず山ゆかば草むす屍海ゆかば水つく屍と言建
て、身をかためたる兵の鎧の袖に輝くや星の位も三臺の影
うすれゆくさしぐしのあかつき闇に打出す火矢の煙に吳竹
のふしみも見へず白鳥の鳥羽も別れぬ折しもあれ空に輝く
月と日の錦の御旗九重の大内山の山風に翻しつゝ公家御門
押開かせて出給ふ大將軍の仁和寺の宮の威風にあたりては
靡かぬ草木もあらじとてふりかへり見る大丈夫が勇氣も常
に百倍し軍呼ひと鳴神のとりさ渡る修羅の道切りつ斬ら
れつ阿鼻叫喚宮に従ふ參謀の其面々は東久世烏丸を始めと
し矢守高崎中沼等四條五條は旗奉行前後左右を打守り勤王

諸藩の鋭兵が火花を散らす一戦は、國の安危とたたづのむ帷
幕の中に置く霜も血汐に染む紅葉の丹き心をとりに
倒れ重なる屍は敵か味方か彼は誰れ時踏しだき行く戦場の
習ひ常なき露の身とかさす劍のつかの間も君を忘れぬ武士
の道の果こそ憐れなれ天地も動く震動に燄逆巻く淀の城見
るく灰となりはて空を掩ひし黒煙跡かたも無く消失して
朝日の光りあらはれぬ七百年の昔より武門に落ちし政權を
治め給ひて樞原の聖の御代の古に復し給ひし大御代の長閑
き春に悦びの眉も開けて打集ひ昔語と過ぎし世を語りつゝ
酌む盃に老たる影もかつ見ゆる此宴こそ目出たけれ此うた
げこそ目出たけれ

新玉の歳立ちかへる春の日に君が齡は千歳ふる松囃とて數
ならぬ我等如きもゆるされて聞くもなか／＼面白や鼓は四
海の浪の音笛は龍王の吟ずる聲名も高砂の尉と姥戀ぞつさ
せぬ妹背とかや神の御前は鈴鹿山悪魔を拂ふのみならず弓
矢の響残されし田村麿の御威勢は今が代までもゆづる葉の
しめ引きまはす井筒より汲めとつきせぬ若氷は老を養ふ便
とかや扱て其次ぎは春の花都に聞ゆる三條の古鍛冶宗近は
心正直にして神慮に叶ひし名劍を造り出して今は又太平の
代となりて古るき詩にもあるぞかし長生殿の内には春秋に
富み不老門の前には日月遅しと申せしは皆彼の心をそ學ば

○松 囃

れて、今此御代といふつげの、とりく、なれや、梓弓、矢竹心の一
つなり、また英雄の交りは、頼みある中の酒宴かな、浮世は盡き
せぬものとかや。

○送別

吉水經和氏作歌

あかねさすわが日の本に人といふ、人のうちより選まれて、海
原遠く浦々の浪の花咲く異國に、わたり行くなる君が名と譽、
は世々に残らむ、茲に船出を祝はむと心を籠めて、足曳の山
にも、狩得海に釣り川にすなとり野に求め、なほあきたらで風
を裂き、鱗を曙りて、盃を勸むる中にかたへより、吟ずる聲の高
らかに

渭城朝雨濕輕塵、客舍青青柳色新、

勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人、

古き調の唐歌に、思ひをよせて別れをば、惜む心もなつかしく、
皆とりく、に又酒をすまめ、興をぞ添へにける、暫くありて
一同に、盃さげ起立して、君萬歳と唱へけり、君萬歳と唱へけ
り。

○灘廻

頃しも彌生の末つ方、君が行衛を尋ねんと、阿漕が濱より船に
乗り漕ぎ出て見れば、南林寺の松の葉色は常磐山、濱に鹽焼く
夕煙、煙は空に横消て消えてあとなき果敢なさや、洲崎に寄す
る白浪は、沖に名に負ふ櫻島、腰地に伊達の雲の帯、咲き亂れた

る花衣きて見ぬ人の心なや、北は祇園の御社玉龍山の鐘の聲
 無明の夢をや覺すらん、吉野の里の遅櫻谷の戸出る鶯の初音
 床しき時鳥波間に見えし沖小島猶告げ渡る鳥嶋の友呼ぶ千
 鳥かすかにて、何れ歎きの種ならん、その名も高き御社愛宕山
 とは是れとかや、筑波の神はをはさねと、鍋の數々田之浦や、大
 磯小磯うち過ぎて、此處は險阻な茅落し、三船の明神伏し拜み、
 暫しは此處にかかり船空しく風に帆を揚げて、君に逢崎龍ヶ
 氷心岳寺をも打過ぎて、此處は脇元別府川や、加治木の里を眺
 むれば、實にや名高き藏王嶽嵐に花の數散りて流れて出づる
 黒川や、七里小濱や、長濱の眞砂の數は盡きるとも、猶もつさせ
 め我が思ひ捨て、置かれぬ濱の市、妻手や小島の辨財天、楯を

傳ふ猿の聲、弓手遙かに見渡せば、彌陀の淨土は八幡の宮居も
 こゝに立たせ給ひ、常燈の光り照らせ給ふ、源遠く流れ出づる、
 新川の沖に釣船數見えて、櫓權の音に驚きて、浮寝の鷗もたち
 騒ぐ、なほも小村の海士人や、苦を敷根の夢にだに、音信もせぬ
 船の中、遠寺の鐘のつくくと、嵐もそよと福山の宮が浦にぞ
 つきにける、宮が浦にぞ着きにける。

○橋中佐

吉水經和氏作歌

奥大將の下にある、大島縦隊の關谷聯隊は、首山堡の激戦に、橋
 大隊長を失ひし、其大略を奏てむに、聞者誰か泣ざらむ、明治三
 十、七とせの八月、みそかにいと堅き石原聯隊を先として、

遼陽一の堅壘を嚴しく襲はしめたれど損害のみ多くして終
 日苦戦をなしければ大島將軍は豫備隊の關谷聯隊を殊更に
 先登部隊と定めける橋大隊長先陣に立て進めば道すがら風
 蕭々として腥く月朦朧として水眠る夜は丑寅となりし頃大
 隊長は號令を下すや兵皆勇みたち獅子奮進の鯨波の聲天地
 も裂んばかりなり斷崖絶壁を攀登り攻入るまでの間には九
 折なる二條の壕を楯とし敵兵は銃丸劇しく打出す鬼神を挫
 く我兵も苦戦に苦戦を重ねては功少ふして損多く橋大隊長
 は牙を噛み阿修羅王の暴るが如くやまと劍を振かざし壕の
 内にと躍り込み大喝一聲叱咤して群がる敵を左り右蜘蛛手
 かくなわ十文字八花形と言ふまゝに露は刈菰と斬て棄つか

る勇猛のふるまひに部下の將卒感激し大隊長を討たすな
 と異口同音に呼はりて壕とも云はず斬入ればさしもに堅固
 の敵壘も忽ち落ちて日の御旗壘上高く翻へり萬歳の聲休ま
 ざりき敵は無念に堪えかねて再び此處に押しかへし鯨波を
 作りて三方よりいと劇しく砲火をば濺ぎ掛れば芳ばしき
 花橋の大隊長左手肩先嫌ひなく深手淺手を負ひたれど從容
 自若神の如く自ら疵に繃帶し四方を見御す絶頂に動きもせ
 ずに直立し敵情具さに見てあるを内山軍曹呼掛けて大隊長
 殿危険なり遺憾ながらも此場合一時退却なさらねば大隊總
 て全滅せむ大隊長は此時に初めて身をば動かして涙を押へ
 劍を撫で部下の斯くまで倒るゝを見てはおのれは耐られず

併し軍曹考へよ、けふは八月三十一日にて、恐れ多くも、東宮殿下の御誕生日ぞ、斯る貴き日に當り、部下三分の一を死なしめて、漸く取りし敵壘を見捨て、彼に與へんは、かへすくも無念なり、許せ軍曹、辛くとも、今上陛下の御爲と、帝國陸軍の其爲に、我と枕を並べつゝ、共に戦死をして呉れよといふを聞居し軍曹は、唯感涙に咽ぶのみ、此時敵弾飛び來り、大隊長は深疵を再び負へば、鬼神を欺く勇士も仰のけにとつと音して倒れけり、内山軍曹驚きて、大隊長殿、大隊長殿と呼はれど、空を横切る砲丸の響の外には音もなし、あたりつくづく見廻せば、大隊長のいはれし如く、友と頼みし友は皆陛下の御爲め國のため死してはかなくなり、にけり、詮方なしに軍曹は、大隊長を肩

に掛け、韋陀天走りに坂道を轉ぶが如くに驅下りて、小松原に出し時、二人諸共敵弾に、腹と胸とを打抜かれ、再び茲に轉びける、暫くありてほのくと、明け行く空に秋風は、身にしみ渡り、虫の音は、いと哀を添ふる時、大吶喊の聲に、二人共目を見開けば、軍曹はおのが深疵は打忘れ、眞心こめて呼起し、大隊長殿、疵は淺し、確乎と氣をば持たれよと、呼覺されし大隊長、兩眼濶と見開きて、われは此まゝ捨置きよ、唯多くの部下を殺せしは、天皇陛下に對し奉りても、我國人にも相濟まぬわれの屍は、汚るとも、魂茲に留まりて、若は堅く守るよと、幽かの聲に力あり、内山軍曹こらへかね、わつとばかりに泣伏して、暫しは言葉も出ざりき、斯くてあるべきにあらざれば、再び大隊長を脊に負

ふて、行かんとすれば力なき、足はずべりて打倒れ、又起かへれば又倒る。心は千々にはやれども、胸の深疵を如何にせん。是より曩に大隊長は、寵愛しつる従卒の伊藤金次郎に命ずらく、此あけがたに、呐喊の聲ある後に銃聲の絶るを聞かば勝利なり。直ちに馬を引來れ、われは追撃に移るべし。若し銃聲絶えざれば、われは戦死の時なるぞ。汝能く心得て、われの屍を持歸れといひ付られて、従卒が戦況如何にと窺ふに、山も崩れ、呐喊の聲は頻りに聞ゆれど、銃聲更に絶えざれば、氣も魂も身に添はず、馳せ付け見れば、如何に、大隊長は軍曹の背に負れて、淋漓たる血潮に染みてありければ、目には涙の玉あられ、手走る如くとびつき、大隊長を己が背に移しかへつゝ泣くも、

味方の陣にぞ歸りける、あゝ嘗て、東宮殿下の御側、に仕へまつりし勇將も、數箇所の疵に堪えかねて、首山堡頭の潮露と消えはしつれど、橘のかほりは長く、遼陽の空より高く、匂ふらむ、空より高く、にほふらむ。

○月 照

平野次郎國臣氏作歌

花の都も秋はなほ、夕淋しき風情なり、名は流れたる清氷や、落ちくるたきの音、羽山散るや、紅葉のちり、くと亂れ行く世の浪、花江や、蘆のさはりは、繁くとも、猶世の爲めに、身をつくし、盡さんども、筑紫瀉波影の岸の浪ならぬ、操をいつか、深緑色は、變らぬ、青柳の驛路を越へて、香椎瀉、多々羅の橋を打渡り、千代

の松原千代かけて、萬代かけて君が世の千歳の松によそへつ
 神に歩を箱崎の社に掛けし四つの文字筆の主をよく問へ
 ば、延喜の帝かしこくも御手をば下しませりつ、爰も昔は石だ
 りみ重ねくし白波の寄せし昔を忘れじと、怨み浦半の片禪
 かけて、歎くも哀れなり、濡衣塚の濡衣、我が身に着たる心地せ
 り、やがて博多の假住居こゝも浪風さはがしく、又行く方は薩
 摩、瀧沖の小島にあらねども、心細くも都にて誰か哀れと思ふ
 らん、たよるは心つくし瀧一人の外に打ちあけて、語ふ人も憂
 き枕波路へだて、野間の關せきとめられて又船にゆられゆ
 られて行く先きは、黒の瀬戸てふ名もうしや、やがて鹿兒島か
 ここの鳥、翼ちめて潜みしが、又木枯におどろきて、日向を指し

て船出せし日は、神無月望の夜の傾く月と、諸共に照りかや
 きて曇りなき身は、大君の御爲とて、前に一人の薩摩人如何な
 る縁さきの世に、契も深き沖の船底の藻屑となりぬるを、乗合
 人も、船人も、權の雫の露ほども、さりとは知らぬ白波の立ち騒
 げども、甲斐ぞなき、猶東雲の明鳥泣くより、外はなかりけり。

○奇縁

吉原翁作歌

良禽は樹を擇んで棲み、良臣は主を撰んで仕ふとかや、茲に故
 左馬頭源義朝の子に、半若丸と呼ばるゝは、父の義朝討れし後、
 母諸共に生捕られ、未だ黒白もわかぬ身の出家になれとて行
 先きも鞍馬寺にぞ遣られけり、月日に關のなくくも、明し暮

して長となり思へば無念やる方なく平家を討て父の仇報は
 でなとか止なんとひとり心を傷めつうきふし繁き吳竹の
 夜なく寺を忍び出月清氷の観音へ今宵も歩を運びつ心
 願成就させ給へと心籠てぞ祈らるゝ扱て又西塔の武蔵坊辨
 慶は獨りつらく思ふやう斯る亂れし世に生れ墨の衣を身
 に纏ひ花香を取りて佛前にあたら此世をこのまゝに朽果る
 まであるべしやよしや不動の利劍を揮ひ人を斬るとも殺す
 とも爪繰る珠數の紐断れて亂れん此世を鎮むべき功だに立
 たばなかくに衆生濟度の道ならむいでや心の儘に振舞ふ
 て後世に名をも揚ぐべしと既に不敵の心を起し夜なく浴
 中を徘徊して往來の人を脅かし太刀刀を奪ひ取り人の謝儀

をも試し見るに手に立つ者のあらざればいよく我慢増長
 し今宵も清氷観音へ来て群集人を覗きしに十四五ばかりの
 公達の讀經なしつゝ在するを牛若丸とはつゆ知らず近く差
 寄り窺ふに容顏眞に麗はしく徒人としては見えざるがつくつ
 く見れば紛ふなく先夜出會ふて不覺を取り無念の殘る其小
 姓よき所にて出會たり思ひ知らせんと悦びて牛若丸の歸り
 道窺ひてこそ居たりけれ機敏達智の牛若は早くもそれと見
 留めてもそしらぬ様にて讀經を畢へ急ぎ寺内を立出で五
 條の橋に差かゝる頃しも秋の半の宵更る川風身にじみて月
 澄み渡る橋の上行くとは無しに歩みつゝ往かふ人も影絶え
 て心すこげに誰が聞けと腰なる葉調取出て吹きすすさみつゝ

渡り行く待ちまうけたる辨慶は、黒革威の大鎧草摺長に着な
 しつゝ、例の薙刀杖と突き、牛若丸の行く先に立塞がりて言ひ
 けるは、如何なる人ぞ夜更て一人見れば、好き太刀佩れたり我
 に與へて罷られよ、さなくば通り得させじと、礮と睨んで立た
 りけり、牛若聞ひてあざ笑ひ、ほしくば此太刀取りても見よ、む
 ざと獲さするものかはと言はせもあへず、辨慶は薙刀取て引
 そばめ、悪き小姓の言條や、さらば斯くぞと、漸て蒐る、牛若憶す
 る氣色なく、靜に薄衣引除けて、太刀抜きかさし渡り合ひ、暫し
 戦ひ攻合ひしが、たゞみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶あし
 らひかね、橋桁二三間飛し、さりいたく肝をぞ消したりける、見
 れば甲斐なき少年に、何程の事のあるべきと、更に勇氣を勵ま

して、薙刀柄長に追取のへ走り懸りて、薙ぎ拂へば、左に外し、右
 に避け、裾を拂へば、おどり越え、頭を薙げば、掻い潜り、前に顯は
 れ、後に迫りて、宛然花に戯る、胡蝶の如く、空に飛びかふ、燕に
 似たり、辨慶秘術を盡せども、姿も定かに認め得ず、次第に氣力
 も、勞れ來て、たゆむ透間を飛か、り、薙刀脆くも、打落され、茫然
 として、ぞ立ちたりける、ふしぎや、御身いかなれば、かほと健氣に
 在するぞ、委しく名乗ましませと、辭を改め言ひければ、予は源
 の牛若なり、汝は誰ぞと問ひ給ふ、扱は義朝の御子に在するか、
 西塔の武藏坊辨慶なり、粗忽の段は免されよ、是より主君と頼
 まんと、茲に主従の約を結び、薄衣被がせ奉り、牛若丸に従ひて、
 尤條の御所へぞ参りける、斯て平家を亡ぼして、共に譽の高き

名は、永く月日と輝きて、蝦夷が千島の睡までも知らぬ人こそ、
無かりけれ。

○物 狂

風に柳亂れ心や狂ふらん、胸のほむらが身を焦す恨めしの浮世
かなあゝ恨めしのこの世かな此里の人の心がさかなく、谷
の埋れ木朽ちく。に言ひ立てられて君と我れ別れく。に鳴
海瀉身の終りこそうたてけれ、思ひ出づれば今は早や我が故
郷に住家なし、いざさらば思ひ立田のこで紅葉夜半の嵐に誘
はれてちりく。になる、一葉の船もこがれいで、水の面に浮浪
繁き身にしあれば、或時は君を恨み、またある時は身を歎き、心
狂氣になれ衣身に餘りたる涙川深き流れに身を沈め、浮ぶ甲

斐なき我身一つを如何にせん、時知りて花も涙や注ぐらん、鳥
も別れを惜みてぞ鳴く、命の輕きことは、唯飛花落葉の如くな
り、君を思ふ心は常にこれ高山、其一念は五百生、懸念萬業無量
劫に至るまで、これ又何の因果ぞや、何れ思ひはなかく、に浮
世にありしありかほの、婆の務めも益はなし、併し浮身をす
て果てんと思へども、流石また輪廻の浪の立つ間にも、其面影
が身に添ふて、片輪車の風情にて、やる方もなき胸の中、今は路
頭も憚らず泣きつ笑ひつ安からぬは、物狂ひとや人の云ふら
ん。